「而して其娘とは別れてお了ひなすつたの？」とアレクサンドラが眉を少し釣上げて愛度氣なく首を傾げて聞く。

「別れて了ひました……而も何の必要もないのに離別口上を並べて、極りの惡い面目ない想をして拙い別れやうをしたです……彼も泣けば我も泣く、いやはやお話にならない始末さ……何やら紛糾かつて了つて始末に行かなくなつて來たから、一思に別れて了はなければならないのだが、さてどうも辛い！　併し世の中の事は如何にか斯うにか皆好い鹽梅に終局がついて了ふもんで、今其娘は好い所天を持つて幸福にしてゐます。」

「それでも、どうもルーヂンさんが恨めしいんでせう……」とアレクサンドラがいひかけると、

「何の、そんなことはない！　反つてルーヂンが外國へ行く時なんぞは見送に往つて子供のやうに泣いた位です。だが實は其時分から最う厭氣は萠してゐたんでせうな。て、其後外國で逢つてから……尤も其時分には私も最う年を取つてゐたが……始めてルーヂンの本色が解つた。」

「解つたと云つて、如何？」

「どうと云つて先刻お話したやうなことでさ。けれども、ルーヂンの話は最う止めませう。事に寄ると、何事もなく濟むかも知れん。唯私は彼男の人となりを知らんから、それで酷評をするのぢやないといふことだけが貴女に解ればそれで可いのです……それからナターリヤさんの事は云はんてもの事だから云ひます

まいが、併しワルイレッオーフの樣子には氣を附けんと不可ませんぜ。」

「ワルインッオーフの？　何故？」

「何故と云つて樣子を御覽なさい。何も變つたところは無いでせうか？」

アレクサンドラは行詰つたが、頓て、

「本當に然うですねえ。成程……彼人も……此頃は全然違つて了ひました……ですが、貴下は……」

「一寸！」とレヂチフは小聲になつて、「先生やつてお出なすつたやうだ。それからナターリヤさんは小兒ぢやない、尤も經驗の無いことは小兒のやうだけれども。今に御覽なさい、彼娘は屹度吃

驚するやうな事を爲るから。」

「如何な事を？」

「如何な事つて……身を投げるとか、毒を服むとかするのは如彼娘に限るてさ、一寸見ると溫當なやうだけれども、非常に熱情があつて、氣性も確固してゐる！」

「えらく大層に仰しやるね、貴下のやうな冷淡な方にや、私なぞは噴火山か何ぞのやうに見えるでせうね？」

「ところが、然うでないね」とレヂチフは莞爾して、「氣性と云つては貴女には、幸福と些ともない。」

「まア、あんな失禮な事を！」

「失禮な事を？　如何して〳〵、非常なお世辭てさ……」

ワルインツオーフが入つて來て胡散さうに二人の樣子を視廻した。此人も此頃は滅切窶れて了つた。二人がいろ〳〵話し懸けて戯言を云つてみても、唯やう〳〵ニヤリとするばかりで、成程ピガーソフの言つた樣に、兎が屈托したやうな面白をしてゐる。けれども、世の中に兎が屈托したよりも最と厭な面を生涯に一度もせずに了ふ者は恐らく有るまい。ワルインツオーフはナターリヤの氣が逸れたと思ふと大地がゆら〳〵と動搖だして足の蹈所も定かならぬやうな心持がするのである。

《七》

翌日は日曜でナターリヤは遲く床を出た。昨日は一日物をも云はず、泪に袖を絞つたのを人知れず羞かしいとに思つてゐたが、昨夜はおち〳〵寢られなかつた、衣服を脱かけたし、どけない風で、小さなピヤノに對つて、Mlle Boncourt が眼を覺ましてはと思ふからそつと調子を合してみたり、又は冷たい壓手に額を押付けたまゝ久らく身動もせずにゐたりしてゐた。始終考へてばかりゐたが、ルーヂンのことを考へてゐたのではなく、ルーヂンの言つた言葉の中に考へることが有つたので、深くそれに思ひ沈むでゐた。をり〳〵ワルインツオーフのことを憶出す。此人に想はれてゐ

ることはナターリヤも承知してゐる。けれども、憶出しても永く思つてゐられない……どうも妙に心が騒ぐ。朝になると、手ばしこく衣服を着て、下階へ降りて、母に挨拶をしたが、其中に機會を見て庭園へ出て了つた……をり〳〵細雨が降つて來る癖に、日光も射して、明るくて、なか〳〵熱い。晴らかな空に烟のやうな浮雲も低くふわ〳〵と漾つて、日を蔽しはせぬが、をり〳〵思掛けない時分に驟雨をどッと落して行くかと思ふと、直ぐ後から罷る。ダイヤモンドでも飜したやうに燦爛する大粒の雨が颯と澄むだ音を立てゝ降りそゝぐと、其雨脚のちらつく隙間に日も煌めいて、今しがた風に揉まれた野草が寂然となつて渇いた喉を雨に霑す。樹々は走とゞに濡れて、力なく、へた〳〵と葉を動かす。鳥は暫ら

くも啼罷まぬ。其口豆に囀づる聲がさつと降つて通る雨の凉しい音に交じるのを聞くと面白いやうである。塵埃だらけの往來も度々の雨の跡を處斑に留めて烟つたやうに見える。その内に浮雲が通り過ぎて了ふと、風が何處からともなく吹いて來て、草がひら〳〵と靡いてエメラルドや黄金の玉を躍らせる。木葉は隙間勝ながらひた〳〵と密着きあつてゐる……其處ら一面に蒸れてむく〳〵とする……

ナターリヤが庭園へ出た時には空は大方晴てゐた。何處ともなく爽然として蕭然してゐる心持が善いので、氣もそれに隨れて和らかに優しくなつて、何とはなしに物慕はしくなる……

池に沿いて白楊の長い並木道がある、その並木道をナターリヤ

が行くと、思掛けなくルーヂンが降つて湧いたやうに鼻の先へ顯はれた。

ナターリヤは狼狽る。其顏をルーヂンは覗きこむで、

「お一人ですか？」

「はア、一人ですが、一寸出て見たばかりで……最う歸りませう。」

「御一所に往きませう。

て並むて歩きだす。

ルーヂンが、「貴嬢は何か憂いてお居でなさるやうですな？」

「私？　私よりか貴下こそお顏色が惡うございますよ。」

「さうかも知れません……能く私には然ういふことがある。

けれども、私は可いが、貴嬢がそんな顏色をしてゐらしッては不可

ませんな。」

「何故です？　私だつて悲しいことも有りますわ。」

「貴嬢方の年頃では此世を娛しく思はなければ不可。」

ナターリヤは默つて二歩三歩する。

「ルーヂンさん！」

「何です？」

「貴下、記えてゐらしつて……昨日のお話を……アノ、樫の木の？……」

「記えてゐますとも。それが如何したのです？」

ナターリヤは竊とルーヂンの面を視て、

「何故貴下は彼樣ことを……お話の趣意がどうも解らなくな

つて……」

ルーヂンは首を傾げて凝然と遠方を視詰てゐたが、頓て例の仔細ありそうな重々しい顔色をして口を開いた。どうも心に思ふ十分一も口には出ないと云ひたさうである。

「貴嬢も氣が附いてゐらつしやるてせうが私は一體身の上談をするのを好まん。私の心の絃には觸らずにそつとして置くのである。私の心は……心が如何なつてゐやうと、それを人に話す必要は無い。そんなことを口外するのは神を褻瀆するも同じことであるが、併し貴嬢には隱立をしません、貴嬢には何となく氣が置けない……だから悉皆打開けて了ひますが、私も人並に戀の味を知つてゐます、隨分苦しむだこともある……何時如何な戀

をしたかは云はてものことだが、併し私も隨分嬉しい思もしたが、また悲しい想もしました……」

少し言葉が斷絶れて、

「昨日お話した事は幾分か私の今の身の上に適つてゐる。けれど、お話しする程のことではない。さういふ人生の一面は私の爲には既う消滅して了つてゐる。私は今後日盛に塵埃澤山の道をがた馬車に乘つて立場々々と追つて歩けばそれで可いのです……而して思ふ所へ行着いてから……さ、それも行着れるものか、行着れぬものか、知れたもんぢや有りません……それよりか貴嬢のお身の上を話をしやうぢや有りませんか

「それては貴下は最う此世に望が無いと仰しやるんですか？」

「いや、然ういふ譯ではない、いろ〳〵望は有ります。けれども私一個の望ではないので。働くといふことは面白いものて、それを我は厭はせんが、併し私は最う面白い思を爲たいとはない。私に望むことが妄想してゐることがあるとすれば、それは私の身の爲てはないのです。戀と云ひかけて肩をすぼめて戀などいふことは最う私は斷念てゐます、私は戀をする資格が無いから。戀をするからには、相手の女から命に懸けて思つて呉れると云はれても仕方がないが、私はもう其樣な事は出來ない。それに人に好かれるなどといふことは若手のする事て、最うかう年を取つては駄目です。如何して他を迷はすどころか、自分の毫碌しないのが目付ものだ！」

「成程解りました。大きい望を持つてゐらつしやる方は御自分にかまけては成らないてせうが、さういふ立派な事が女にだつて解らないことは有りませんわ。解らないどころぢやない、自分の事ばかり思つてゐるやうな其樣な人は女の身にしても厭だと思ひますわ……それだのに若い男の、貴君の仰しやる若手の方は皆手前勝手の人て、人を愛した時でさへ自分の事は忘れずに居るやうな人ばかりてすものを。犧牲になるといふ心持が女に解るばかりでなく、女だつて犧牲にならうと思や、なれます。

ナターリヤは少し頰を赧らめて、眼の色を變へてゐる。ルーデンと知己にならぬ迄は、これほどの長文句をかう熱心に云つたことは恐らくあるまいと思はれる。

ルーヂンは善くも言つたと云はぬ計りに莞爾して、「私の婦人の天職についての考へは最う度々お話をしたから御存じでせうが私はジアン、ダルクは獨力を以て佛蘭西を救つたのだと思ふ：……けれども、まアそんな事は如何でも可いとして、私は貴嬢のお身の上の話がしたい。貴嬢はこれからといふ所だから、貴嬢の行末の話をするのは面白くもあるし、又滿更徒言でもないでせう：……そこで、申すまでもないが、私は貴嬢の親友で、貴嬢の事となると他人の事のやうに思へないから、お尋ね申しても失禮には當るまいと思ふが、貴嬢は何ですか、これまで男に迷つたことはありませんか？」

ナターリヤは耳の附根まで紅くして、何とも答へなかつた。雙

方齊しく立止まつて了つた。

「お氣に障りましたか？」

「いゝえ、ですが……アノ……餘り不意でしたから……」

「併し、仰しやるまでもない。私は貴嬢の秘密を知つてゐます。」

ナターリヤは駭然として相手の顏を見た。

「知つてゐます、誰を貴嬢は好いてゐらつしやるか。だが至極結構なお見立だと思ふ。彼方なら申分はない貴嬢の價値も屹度解ります。まだ入摩れてはゐないし、それに淡泊で純潔で……屹度貴嬢はお幸福だ。」

「誰の事を仰しやつてゐらつしやるの？」

「とぼけちや不可ません。勿論ワルインツォーフさんの事でさ。

え、如何です？、それに違ないてせう？」

ナターリヤは少し身をそむけた。ほと〳〵途方に暮れたのである。

「ダルインツオーフさんは貴嬢のことを何とも思つてゐないてせうか？　どうも然うは云はれんやうですな。貴嬢の面を諦視めて、眼で跡を追蒐けて歩く。どうしても素振に出る。それに貴嬢も満更でもないやうだし、また御母様にも、私の見た所では、御氣に入つてゐるやうだしするから、貴嬢の御見立は……」

「ルーデンさん！」とナターリヤが話の腰を折つたが、狼狽して手近の灌木に掴まらうとした。「此樣なお話をするは何だか極が悪くつて厭ですけれども、貴君は思違をしてゐらつしやいますよ。」

「思違ひ？……てせうか？　私は未だお馴染は薄いが、貴嬢のお心はチャンと洞察てゐた積だが……まづ貴嬢の御樣子が全然變つた。それは確に變つて了つてゐるが、これは如何したもんてせう？　六週前の貴嬢と、今の貴嬢とは全て別人だ。いや、何と仰しやつても、貴嬢のお心は平でない。」

「それは然うかも知れませんが、それても貴君は思違をしてゐらつしやいます」、と云つたが、ほと〳〵聽取りかねる程の小聲であつた。

「如何して？」

「最う此お話は廢して頂戴。」とナターリヤは、住居の方へ急足に行かうとする。

ふと我にも思掛けない心持になつて來たので、思はず慄然としたのである。

ルーヂンは追縋つて、腕を控えて、「ナターリヤさん！　此お話はどうも是切にはならない、私に取つても大事の事だから……私は如何も思違をしてゐます？」

「最う廢して頂戴！」

「何卒、ナターリヤさん、何卒其樣なこと仰しやらずに……」

ルーヂンは蒼ざめて、胸をわく〳〵さしてゐる。

「何も彼も御存じの癖に其樣な……」と把られた手を振解いて、後をも顧ずして匆々と行く。

「僅た一言言遺したことが有る。」

とルーヂンが後から呼掛けた。ナターリヤは立止まつたが、併し振向きはしなかつた。

「昨日何故私が樫の木を譬に援いて彼樣なこと云つたのか、その心持が解らんと仰しやつたが、虚言を吐きたくないから、白地に云つて了ひますが私は自分の身の上、過去の事を云つたのです。貴嬢にも關繋してゐます。」

「えッ！　私に？」

「然うです。嘘言を吐きたくないから何して了ふが、貴嬢に關係してゐます。かう云つたら、最う何の話だか お解りになりましたらう……私は今日まで云ふまいと思つてゐたけれど……」

ナターリヤは不意に顔に手を加てゝ、駈出した。

思掛けない談話になつて來たので、堪らなくなつて駈出したのだが、ワルインツオーフが立木に倚つて凝然と立てゐた其側を通りながら、それが眼に入らぬ程であつた。ワルインツオーフは十分ばかり前になつて來たのであるが、客間へ入るとダーリヤが居たので、一言二言話をして、それから窃と脱けてナターリヤを探しに出た。戯をする者の常としてそれと蟲が知らせたから、いきなり庭へ出ると、果して二人の者に逢着したが、其時は恰どナターリヤがルーヂンに把られた手を振解く時であつた。ワルインツオーフはそれを見ると眼がくら〳〵とした。て、ナターリヤを目送つて、立樹を離れて二歩ばかり前へ出たが、何しに何處へ往かうてもないので。ルーヂンも側へ來てから始てそれと氣が附いたが、

互に眼を睨み合した儘、何とも云はずに辭儀をして分れて了つた。

「此儘には濟まされん、」と二人とも心中に思つた。

ワルインツオーフは庭の端へ來た。どうも悲しく、辛く、胸を壓付けられるやうで、兎もすれば氣が荒立つてむら〳〵となる。また細雨が降り出して來た。ルーヂンは部屋へ戻つたが、これも矢張落着いてはゐられない。心が顫動して了つてわさ〳〵するばかりで。尤も恍惚娘に一圖に思込まれて、それを思掛けず諦めかされたので見れば、こりや誰しも平氣ではゐられまい。

食時の時もどうも妙な鹽梅であつた。ナターリヤは眞蒼な面をして、辛うじて椅子に憑つてゐたが少しも面を揚げえなかつた。ワルインツオーフは例の通り其側に座つて時々〳〵戯々話をしてゐ

た。恰ど其日はビガーソフも來てゐたが、此男ばかりは善く喋舌つてゐた。種々な事を喋舌つてゐる中に、頓て人間を犬同様尻尾の長いのと短いのと二種に分けられるといふことを論じ出して、こんなことを云つた――尻尾の短い人にも天性と心柄との二種あるが、どちらにしろ不幸なもので、何事も成就しない――自信といふものが無いから。けれども、長い房々とした尻尾を有つてゐる人は幸福もので。尻尾の短い人より不出來な薄弱い人もあらうが、兎に角自信が厚い。尻尾を擴げると皆が賞める。不思議な事には、尻尾と云へば人の身體中て一番無用なものだ、尻尾が何の役に立つ？　それてゐて皆が尻尾て人物を鑑定する。

「私は、」と溜息を吻いて、「私は尻尾の短い種だ。それも可いが、

自分て截つて了つたのだから厭になつちまふ。」

「と云ふのは、貴君よりズット前にラ、ロシフコ、ーが先づ自ら信ぜよ、然るときは人汝を信ぜんと云ふたことが有る、それを仰しやるのてせうが、何故尻尾を引合に出さなければならんのだか、それが私には解らん。」

とルーヂンが何氣なく云ふと、ワルインツオーフは眼の色を變へて、聲鋭く、

「如何云つたつて可いぢや有りませんか？　壓制々々つて惡く云ふけれど、才子の壓制ほど癪に障るやつはない。糞ッ！」

ワルインツオーフの此暴言に驚かされて一座寂然となつた。

ルーヂンはワルインツオーフの面を視やうとしたが、其睨み詰め

た眼付が無氣味であつたので、餘所を向いて苦笑をしたばかりで、一言も口を開き得なかつた。

「へ、へ！　此奴も尻尾が短いわい！」とビガーソフは思つた。ナターリヤははらはらしてゐた。ダーリヤは呆氣に取られて久らくワルインツォーフの面を見守めてゐたが、其内に眞魁けに口を開いて、親友であつた何とやらいふ大臣の飼犬に各犬があつた話を仕出した……

食事が濟むと間もなくワルインツォーフは歸つて了つたが、ナターリヤに挨拶する時には耐らなくなつて、

「何を貴嬢は然う濟まん面をしてゐらつしやる？　宛て何か義理の缺けることでも爲すつたやうですよ。そんな事が有らう筈はないけれども……」

ナターリヤは何とも合點がゆかなかつたから、唯其後影を見送るばかりのことであつた。茶の出る前にルーヂンはナターリヤの側へ來て、新聞を覽る風をして卓の上に屈み懸つて、小聲ながらに

「何だか夢のやうですね？　是非一度……一分間でも可いから相對でお話が仕たい。」と Mlle Boncourt の方を向いて、「それ、これてさ、貴女の探しておゐでなすつた雜錄は。」更にナターリヤの方に屈みかゝつて、「十時頃にだら〳〵降の連翹の四阿屋まで來て下さい。待つてゐますから……」

其晩持てたはビガーソフで。ルーヂンは様を讓つて了つた。ビガーソフは大きにダーリヤを笑はした。まづ去る隣に居た地

主の話をしたが、此男は卅年も細君の臀に敷かれてゐたので、全然女に孵化つて了つて或時ビガーソフが觀てゐると、淺い水溜を渡ると云つて、女のやうに手を後へ廻して、上衣の裾を横つちやうに取つたといふ。それから他一人の地主の話に移つたが、此男は最初「マソン」宗を奉じて、それから鬱憂病に罹つて、果は銀行家になりたいと云ひだした。

「何で貴君はマソンになんぞ成つたんです、と問くと、

「何てと云つて、貴君、小指の爪を長く生してゐたんですものッ。」

けれども、何よりもダーリヤの可笑がつたのは、ビガーソフが戀の咄を始めて、これても女に惚れられたことがある、さる獨逸人などは、尤も盛な女であつたが、貴君はおいしさうだとさへ云つたと云

つた時て。ダーリヤは大層可笑がつたが、併し虚言ぢやない、ビガーソフも仲々隅には置けない男てある。彼の云ふには、女を惚れさせるのは造作もないことて。十日も續けて、貴女の眼元や口元は千兩だ、貴女に比べれば他の女は皆お多福だと云つて聽かせると、十一日目には自分も本統に目元と口元に千兩の價値があるやうに思つて惚れて了ふものだと云ふ。廣い世界であるからビガーソフの云ふやうなことも有るかも知れぬ。

* * * * * *

九時半といふころには最うルーヂンも四阿屋に來てゐた。向上れば蒼々とした空の奥深い處に星がちら〳〵と見えるが、西の空はまだ夕陽の餘波を留めて、空と地との境目も格別に判然見え

る。かごとがましい音を立てる樺の薄暗い梢から片割月の影がちらめいて、種々の立樹が或は枝と枝とを折重ねた透間を眼のやうに明けて怖ろしげな巨人のやうに立はだかつてゐるもあれば、又は眞黑に押塊まつて物凄い樣に見えるもある。木の葉はそよとも動かず、連翹やアカーチヤの木杪が微溫い空氣の中に突出て何か物の音に聽入つてゐるやうな怜好をしてゐる。間近には家が黑むでゐて、その細長い窓に燈火が射して赤々と見える。誠に靜かな穩かな晩ではあるが、その押鎭まつた中に何處か熱い息をむッと吹溜めたやうな處がある。

ルーヂンは腕組をして凝然と聽耳を引立つてゐた。胸では烈しく動悸を打つて、覺えず息氣を呑込んでゐる。と、其內に輕い急

足の音がして、ナターリヤが四阿屋へ入つて來た。

ルーヂンは飛附くやうに立向つて兩手を把つた。手は氷のやうに冷えてゐる。

顏へ聲を低めて、「ナターリヤさん！　明日を待れんで、此處まで出を願つたんだが……私は……今まで、今朝まで自分ながら氣が附かずにゐたが……私は貴嬢に迷ひました。」

といふと、ナターリヤの手が握られた儘で幽に慄然とした。

ルーヂンは重ねて、「私は貴嬢に迷つた。それを如何して今まで氣が附かずにゐたか考へて見れば不思議のやうです、如何して永い間自ら欺いてゐられたかと思ふと……それで貴嬢のお心が伺ひたいのだが、ナターリヤさん、貴嬢は私のやうな者でも何とも

思つてゐて下さるか？」

ナターリヤは辛うじて息氣をしてゐる。

久らくしてから、「此通り來たのに貴君はそんな……」

「いや、それぢや不可私のやうなものでも何とか思つて下さるか、それを判然仰しやつて下さい。」

「そりや、私だつて……アノ……お慕ひ申してゐます……」

ルーヂンは更に緊とナターリヤの手を握メて、側へ引寄せやうとすると、ナターリヤは急に後を振向いて、

「放して頂戴　誰だか立聽をしてゐるやうですよ……何卒後生だから、氣を附けて頂戴よ、ワルインツオーフが感附くと不可ませんから。」

「ワルインツオーフなんぞ如何ても可い！　今日彼樣な事を云つて、私は默つてゐた位だ。あゝ私は幸福人だ！　最う斯うなつちや誰が何と云つたつて離れるこつちやない！」

ナターリヤは凝然とルーヂンの眼の所を見て小聲で「放して頂戴よ。最う歸らないと不可ませんから。」

「最う少し……」

「最う不可ませんよ。放して頂戴よ……」

「貴嬢は私を怖がつてゐますね？」

「いゝえ、然うぢや有りませんけれども、最う本當歸らないと不可ませんから……」

「そんなら最う一度云つて下さい、貴嬢は本當に私を……」

「貴君は本當に幸福だと思召して？」

「世界中に私ほど幸福な者はない！　それを貴嬢は疑ぐるなんぞつて、どうも非道い。」

ナターリヤは面を揚げた。蒼褪めた面で有つたが、氣高く若々としてゐて、氣もそゞろになつてゐる樣子で、それが四阿屋の影の中に薄暗い月光に透かして薄々見える所は何とも云へず美しい。

「見捨てちや厭ですよ……」とナターリヤは云ふ。

「あゝ、どうも!!……」とルーヂンは聲を揚げて寄添はふとする……

突と外してナターリヤは出て行つて了つた。ルーヂンは少しの間佇立むてゐたが、頓て徐に四阿屋を出て行く其面を月が正面

に照らした所を見ると、唇に微笑が漾つてゐた。

「難有い！」と、小聲に云つたが、それでは未だ安心がならぬやうに、また繰返して、「どうも實に難有い！」

而して反身になつて、飜れかゝる頭髪を振揚げて、浮々と手を振りながら、庭の方へ往つて了つた。

すると、四阿屋の灌木を窃と押分けて、バンダレーフスキイが面を出した。きよろ〳〵四邊を視廻して、首を振つて、口を窄めて、仔細らしく、「これだもの？　何はさて措きダーリヤ樣のお耳に入れなければならん。」と云つてまた隱れて了つた。

（八）

ワルインツォーフは家へ歸つて來ても恐ろしく憂いて、無機嫌な面ばかりしてゐて、姉が物を云つても碌に返事もせず、匆々に部屋に閉籠つて了つたので、到頭レジチフの處へ使者が立つた。アレクサンドラは何か思案に餘る事があると、レジチフに相談することにしてゐるのである。で、レジチフは明日參上するといふ返事が來た。

ワルインツォーフは翌朝になつても未だ面白からぬ顏色をしてゐる。茶が濟むと、田圃へ出やうとしたが罷めて、長椅子に臥ころんで、珍らしく讀書を始めた。一躰文學がかつたとは好かぬ質

て詩となると怖毛を振つて怖れる。「此奴あ解らない、詩のやうだ、」といふのが癖で、いつもその證據にと詩人アイブラートのかういふ歌を讀むで聞かせる、

„聖の身にも、世に經れば、
„憂事しげし、ありはてぬ、
„命待つまのそのほどは。

アレクサンドラは弟の樣子を見ては心配さうな顏をしてゐたが、併しどうしたとも云はなかつた。其内に馬車が玄關に着いたやうだから、やれ嬉しやレジチフが來たと思つたら、僕が來てルーチンが來たと知らせる。

ワルインツォーフは書物を投出して、首を擡げて、「誰が來たと？」

「ルーヂン様ドミートリー、ニコライヂ様が入らつしやりました」

ワルインツオーフは起上つて、

「お通し申せ。姉さん、」とアレクサンドラの方を向いて、「貴女は少し遠慮して下さい。」

「何故！」

「何故でも可いから、遠慮して下さい。」と肝癪紛に云ふ。

ルーヂンが入つて來た。ワルインツオーフは部屋の中程に突立つたまゝ素氣なく辭儀をしたばかりで、手は出さなかつた。

「思懸けないでせうな？」とルーヂンは先づ口を切つて、帽子を窓へ載せたが、唇が能く視ると震へてゐる。どうも極りが悪いけれど、それを紛らさうとしてゐるのである。

ワルインツオーフは「成程思懸けませんな。昨日の樣な事があつて見れば、誰か他の者が來る筈ですからな——貴君に頼まれて。」

「成程、然うてせう、」とルーヂンは椅子に腰を掛けて、「然う打開て下されば難有い。其方が幾ら好いか知れません、私も貴君を紳士と思ふから自身に伺つたのですが……」

「お世辭は略にならんでせうか？」

「お世辭ぢやない、伺つた主意を陳べるのです。」

「知己であつて見ればお出になるのに不思議はないぢや有りませんか？　それに始てお出なすつたのぢや有るまいし……」

「兎に角私は自分も紳士と思ひ、また貴君をも紳士とお見掛け申して參つたのですから、一つ篤と考へて戴きたいのだが、私は深く

貴方を信ずるから……」

「一體何の事です？」とワルインツオーフが云つたが、かうなつても未だ座舗の中央に突立つてゐる、不機嫌な面をしてルーヂンを睨付けながら、折々髭の端を拈りながら。

「まづ、お聽き下さい……私は勿論辯解に來たのであるが、併し一寸かい摘んで云つて了ふ譯にはいかない。」

「何故いかんです？」

「といふものは去る人にも關係した事だから。」

「去る人とは？」

「大抵解つてゐながら貴君も……」

「いや些とも解つてゐません。」

「どうも貴君は……」

「私は迂遠い話は嫌ひです！」

ワルインツオーフは心から怒り出したのである。

ルーヂンは眉を顰めた。

「宜しい……他に人も居ないつたから……他の事でも有りませんが――併し多分既にお察しの事だと思ひますが（ワルインツオーフが焦かしさうに首を縮めたから）――ソノ何です、私はナターリヤさんを思つてゐるし、またナターリヤさんも私を思つてゐるものと見えますが……」

といふとワルインツオーフは眞蒼になつたが、併し何とも云はず、窓際へ云つて此方を振向きもしない。

「勿論若し實際然うでなかつたならば……」

とルーヂンが言葉を續けると、ワルインツオーフは狼狽て、

「いやそれは實際でせう。私は些とも疑はない……なに、結構でさ。併し唯何の必要があつて其樣なことを態々風聽しにお出なすつたのか私には解らん。誰を貴君が思はうと、また誰に思はれやうと、そんな事は私の知つた事ぢやないぢや有りませんか？私は貴君のお心持が解らん。」

ワルインツオーフは矢張窓を覗いてゐたが、聲が何となく曇つてゐた。

ルーヂンは起上つて、

「いや、私が今日斯うやつて伺つて、兩人の中……我々の關係を

全然貴君にお話し申して了はうと思つたのは、それはソノ何です。私は深く貴君を尊敬してゐるから、それで伺つたのです。私は：彼女も然うでせうが……貴君に對して茶番めいたことは仕たくない。貴君のナターリヤさんを思つてお居でなさることは私も承知してゐます……それは私だつて正可己惚れてもゐないから、現在貴君といふものが有る所を私に見返らせるなんぞといふ、そんな德は私にないことも知つてゐますが、併しそんな間違つた事が若し有るとすればですな、貴君は如何思ひますか、面を蒙つて貴君の眼を抜いた方が可いと思ひますか？　お互に誤解して、例へば昨日のやうな事が有つた方が可いと思ひますか？」

ワルインツオーフは腕組をして胸を押へるやうにしてゐる。

落着かうとしてゐるのであらう。

ルーヂンは言葉を續けて、「成程私は貴君の感情を害したでせう、それは私にも解つてゐます……けれども此處を能く考へて下さい……生中隱蔽などをしては貴君を輕蔑したことになる、貴君の正直で賤しい御心なぞは微塵もないのを能く承知してゐることが分らなくなる。それは他の方なら全然暴露けてお話して了ふのも變でせうが、貴君だからお話して了はなければ反て義理が闕ける。我輩の秘密を貴君が御存じであつて見れば、私共も眠覺が快いといつたやうな譯で……」

ワルインツオーフは故意とらしく高笑をして、「いや如何も大層御信用下すつて難有い！　けれども、お氣の毒ながら私は貴君

の秘密を知りたくもなければ、又自分の秘密を貴君に打開けたくもない、然るに貴君は私の秘密を自分の秘密かなんぞのやうにヅンヅン素破拔いてお了ひなさるが、隨分御遠慮がなさすぎますな。それも然うだが、聞いてゐれば貴君は先刻から私共々々と仰しやつたね。してみれば、ナターリヤさんも貴君が斯うやつてお出なすつたことも、またお出になつた趣意も御承知なんですか？」

ルーヂンは少し狼狽いた。

「いや、ナターリヤさんには何とも云はずに來ました。併し彼人にしても私に贊成しないといふことは無からうと思ひます。」

ワルインツオーフは暫らく默つてゐたが、頓て「成程、御道理です、と云つて窓玻璃を指の端で二ッ三ッ叩いて、「併し最少し私を輕く

視て下すつたら尙ほ善かつたですな。正直に云つて了へば、貴君に重く視られて餘り難有くない。併し、それはそれとして、一體如何しろと仰しやるんです？」

「如何しろてもない……いや、一つお願が有ります。何卒貴君も私の意を汲分けて、私を狡猾な奴だなぞと思つて下さらぬやうに願いたい……最う私の誠心誠意を以て動いてゐることは解りになりましたらうから、何卒親友としてお分袂申したい。今迄のやうに一つ握手させて下さらんか……」

と起上つてワルインツオーフの側へ寄らうとするを、ワルインツオーフは振返つて見て、一足後へ却退つて、

「いや、御免を蒙らう。それは成程貴君の仰しやる所は御道理で

せう、いや御道理どころか、ズツト凡俗を離れてゐませう。けれども、私共は凡人です、霞を食つて生存てゐるのぢやアないから、貴君のやうな聖人の思慮へは這入れない……貴君に誠心誠意と思はれる事でも私共から視れば誠に無遠慮な押付けがましい事のやうで、貴君から視れば義理明晰で何でもない事でも、私共の身になつては何だか錯雜つてゐて更に譯が解りません……何しろ私共なら秘して置くことを貴君は暴露けて了つて、それで得意でお居でなさるんだから、解りやうがないぢや有りませんか？　から、御氣の毒ですが、貴君を親友と思ふことも出來ないし、また貴君と握手することも厭です……私の云ふことは或は可卑なとかも知れないが、一躰私が可卑な人間だから如何も仕方がない。」

ルーヂンは窓の帽子を取つて、さも不本意さうに、「では私はお暇致します。此樣なことに成らうとは思はなかつたが、併し考へて見れば、成程私の伺がつたのは隨分變でせう、唯私は貴君の事だから多分(ワルインツオーフが我慢が爲きれぬやうな身振をしたので)……併し、最う此話は廢めませう。兎に角考へて見れば、貴君の仰つしやる所は御道理で、貴君の身となつたら他に仕樣もないでせう。から、私も最うお暇致しますが、唯可厭やうだが私は決して惡意があつて參つた譯ぢやない、それだけはお含み置き下さい……又貴君は無暗な事を他言なさるやうな方でないことは能く承知してゐますが……」

といふとワルインツオーフは腹立だしさに身を慄はして、一段

聲高に、

「餘りと云へば失敬な事を仰しやる！　貴君なんぞに善く思われたいことは些ともない。何を饒舌らうと私の勝手です！」

ルーヂンは何か云はうとしたが、思反して、如何も仕樣がないといふ身振をして辭儀をして出て行つて了つたから、ワルインツオーフは長椅子に打倒れて壁を睨むでゐた。すると、

「這入つても可うございますか？」

と入口にアレクサンドラの聲がする。

ワルインツオーフは一寸とは返答が出なかつた、窃と面を撫て廻して、少し五音の狂つた聲で、

「今は不可、最う少し待つて下さい。」

半時ばかり經つと、アレクサンドラが復たやつて來て、

「レジチフさんが來ましたよ。會ひますか？」

「會ひませう。遣して下さい。」と答へる。

レジチフが這入つて來た。

「如何したんだ――加減でも惡いのか？」と長椅子の側の肱懸椅子に腰を掛ける。

ワルインツオーフは少し起上つて、肱を突張つて、凝然と眼を据ゑてレジチフの面を見守めてゐたが、頓てルーヂンとの談話を遺漏なく話して聞かせた。是迄レジチフに對つてはナターリヤを慕つてゐることを噫にも出したことはなかつたが、レジチフも氣取つてゐるとは勿論心附いてゐたのである。

ワルインツオーフが話し終るや否や、レジチフが「いや如何も驚いた！　彼奴は變な奴だとは思つてゐたが、是程とは思はなかつた……併し、彼奴の仕さうな事だね。」

「だつて、君餘り非道いぢやないか！　僕は餘程撮み出して遣らうかと思つた。一體まア如何したんだらう、高慢を並べて行つたんだらうか、それとも憶してゐたんだらうか？　どうも來る所に事を缺いて僕の所へ……」

と云ひかけて兩手を頭に敷つて默つて了つた。

レジチフは例の落著いた調子で「いや、然うでないよ。君は僕の云ふことを信じないけれども、それは惡意があつて來たのぢやないよ。全くだよ……自分で來て話を付ける――どうも洒々落

落としてゐて男らしいぢやないか？　それに雄辯を揮ふ機會を得たといふものだから、そら堪らないや……どうも彼奴のためには口は敵だね……その代り隨分能く言ふことを聽くから味方にもなるけれども。」

「如何なに威張つて這入つて來て喋舌つて行つたらう、見せたかつた！」

「然うだつたらう。何しても神聖なる義務を盡す氣なんだから上衣の釦紐を掛けて着手るんだ。彼奴を無人島へ連れて行つて、如何するか、隅から見てゐたら、面白いだらうね。それでゐて口ぢや始終質樸々々と云つたもんだ！」

「一體如何いふんだらう、矢張哲理から割出したんだらうか？」

「然うさな。如何云つたもんだらうな。一方から云へば先あ哲理さね――けれども又一方から云へば然うでもないんだ。降らん事なら何でも哲理に押被せて了ふ譯にも不能からね、」

ワルインツオーフはジロリとレヂチフの面を見たが、

「彼奴口と心と反對しちやゐまいか？　君は如何思ふ？」

「いや其樣な事はあるまい。けれども、まア此樣な話は廢めにして、一ぷく喫らうぢやないか、而してアレクサントラさんを喚ばう……アレクサンドラさんが居ると、話をするにも默つてゐるにも都合が好い。屹度茶でも喫ませて貰へやう。」

「それも然うだ。姉さん、お這入なさいな！」

と呼ぶ。

姉が這入つて來ると、ワルインツオーフは唐突其手を把つて、ひしと接吻した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ルーヂンは家へ歸つて來たが、何とも云へず妙な心持がする。考へて見ると、自分ながら愧かしい。輕擧にも程の有つたもので、誠に兒めいてゐる。何か事を爲た後で馬鹿氣てゐたと心附いた程切ないものはないと誰やら云つたことがあるが、成程それは然うに違ひない。

考へれば考へる程どうも口惜しい。

「糞ッ、何だと云つて彼樣な家へ往つたんだ？　自分で自分の氣が知れない。恰て罵られに往つたやうなもんだ！……」と呟や

いた。

家内の動靜を視ても何處か變てある。主婦は朝は勿論晝餐にも出て來ない。バンダレーフスキイの外誰も側へ往くことを許されなかつたが、そのバンダレーフスキイの話では頭痛がするといふことである。ナターリヤも Mlle Boncourt（マドモアゼール ボンクール）と部屋へ閉籠つて了つたきり殆ど姿を見せない。一寸食堂で出遭つたが、さも悲しさうな眼付をして凝然と顏を見るから、ルーヂンも堪らなくなる。ナターリヤの顏色の勝れたのを見ても、昨日別れてから何か厭な事が降つて湧いたらしく思はれる。何と取留めた事はないが、何か事ありさうで居ても起つても居られない。如何かなして紛れやうと思つて、バシストフと話をした。久く話をしたが、バシスト

フは相變らず熱心で活潑なもので、未來に望を繫けて、それに夢中になつて、まだ世の味を知らぬから、何事をも深く信じてゐる。夕方になると、ダーリヤが客間へ出て二時間ばかり座つてゐた。ルーヂンに對つては愛想よくしてゐたが、然し何となく餘所々々しいところも有つて、或は冷笑をしたり、又は八の字を寄せたり、物を云ふにも鼻聲で、半分しか言はず――どうも大層取澄してゐる。近頃は何となく愛想がない。「如何したんだらう」とルーヂンも首を捻つた。少し反らしたダーリヤの横顔を視て。

が、此不審は忽ち霽れた。夜の十二時頃部屋へ戻らうとして、薄闇い廊下を通ると、ふと誰やら手紙のやうなものを押付けるやうに手渡にして逃げ出して行く。振返つて視ると、どうもナターリヤの小間使らしい。部屋へ戻つて、僕を追拂つて、さて手紙を開いて視たが、ナターリヤの手で走書にかうしてあつた、

近頃打つけながら明朝七時に樫の森のアウヂューコンが池まてお越下さるべく候七時を外せば最早御目もじえ叶ふまじくと存候品に寄ると、これが永の御別れになるやも知れず候へど兎も角も御越の程待上る〳〵何とか致さては叶はぬとに相成り申候かしく

なほ〳〵若し此方より參らぬやうに候へば最早其迄の事と思ひ捨てられたく尤もその節は使の者を以て改めて申上ぐることもあるべく候

ルーヂンは手紙を玩弄にしながら凝然と考へ込むでゐたが、頓

て手紙を枕の下に收めて、衣服を脱いで、褥へ入つた。けれども、なかなか睡就かれなかつたしまた眠てもおち〳〵してもゐられなかつたから、まだ五時にならぬ内に眼を覺して了つた。

《九》

ナターリヤが出遭の場所に擇んだアウヂューンが池といふのは久しい前から最う池ではないのである。三十年計り前に堤が崩れたとかで、それから棄物になつて了つたのであるが、今は唯窪然穴が開いてゐるばかりで、其昔浮垢が浮いて黏りした泥であつたのがいつか乾固まつて平な底になつてゐるのと所々に堤の壞れが形ばかり殘つてゐるのとで、それと察しが附くだけのことであり。舊と池の邊に邸が有つたが、これも疾うに取拂はれて、今は其跡に大きな松が二本形見に殘つてゐて、高い所の痩枯れた枝に始終風を受けて凄い音を立てゝゐる。此松の根方で人殺が有つ

たとかて物凄い話もあるが、一體此邊の松は倒れゝば屹度人を殺める、現に舊と茲に在つた一本の松が嵐に吹倒されて女の子を壓殺したこともある。どうも此界隈には魔物が住でゐるらしいといふことで。人里には離れてゐるし、淋しくはあるし、白晝通つても森としてゐて凄い處であるが、近所に枯々になつた古い檪の森の跡があるだけに尙ほ物凄い。背の低い灌木が一面に生茂つてゐる其間に、稍黑ずむだ大木の株が處々にヌッと突出てゐる所を觀ると、宛で惡黨の老爺が寄集つて惡事でも企むでゐるやうな趣があつて、何となく薄氣味惡くなる。一方には狹い細い徑が幽かにうね〳〵と附いてゐる。こんな淋しい處であるから、格別の用がなければ、誰も此池の端を通る者はない。それでナターリヤも

此處を出遣の場所に極めたのであるが。ダーリヤの邸からはほんの三四町しかないのである。

ルーヂンが池まで來た頃は夜が明てから最う餘程經つて居た、今朝は天氣も冴々しない。空一面に乳色の村雲が蔽さつてゐて、それを風が烈しい音を立てゝ吹捲つてゐる。動もすると袴に絡まるロプーシニクと黑味がゝつた苜蓿の一面に生茂つた堤の上をルーヂンは往きつ戻りつ歩いてゐたが、どうも氣がわさ〳〵してならぬ。今にナターリヤに逢ふのだと思ふと、妙にそれが氣になつて心配でならぬ、昨夜彼樣な手紙が來て見れば、尙更氣懸りで落着いてゐられない。屹と腕組をして四邊を顧廻した所は如何にも腹が据つてゐさうであるが、實はどうかせねばならなくなつ

て來たと、思ふと、内々狼狽するのである。ビガーソフが曾てルーヂンを評して彼男は佚儒のやうに頭がちだと云つたことがあるが、成程それに違ひない。併し頭ばかりでは、如何樣に出來の善いのでも、自分で自分の心さへ解らぬ勝のものであるから、如何に賢い眼から鼻へ抜けるやうなルーヂンでも、自分は一躰ナターリヤを愛してゐるのだか、居ないのだか、苦むでゐるのだか、居ないのだか、又是から先も苦しめやうか、苦しめまいか、それが慥には解らないのである。ルーヂンだと云つて、正可ロウラーイを氣取つてゐるのではない——それは慥に其樣なことはないが、それなら何故、氣の毒らしい、ナターリヤなぞを迷はしたのだか、其理由が解らない。ナターリヤに遭ふのを窃に怕れてゐるのも怪しい。けれども情の薄いものに限つて惚れつぽいといふこともあるから、或はそんなことかも知れん。

堤の上を歩いてゐると、頓てナターリヤが露けき草を踏しだいて、野を横に此方へと來る樣子である。

マーシャといふ小間使が息氣せき切つて跡から隨いて來たが、

「お嬢さま！　お嬢さま！　御足が濡れますよ。」

けれども、ナタリーヤは其樣な事には耳をも假さず、後をも顧ずに驀然に驅けて來る。

マーシャは仲々默らない。「何卒眼付らなきやア可いが……能くまア家が出られたと思つて……奥樣がお眼覺になつたら大變だが……アヽ嬉しい、最う彼處だ……」ルーヂンが堤の上

に例の恰好の好い風て畫に描いた樣に立つてゐるのを見付けて

「あら、もう待つて居らつしやしますよ！　まア、堤の上なんぞに――池へ降りてゐらつしやれば可いのに。」

ナターリヤは立止つた。

「マーシャ、お前は此處の松の處に待つて居てお呉れ、」と云ひ棄てゝ、池へ降りて行く。

それと見てルーヂンは側へ來は來たが、吃驚して立止つて了つて。ナターリヤの此樣な面付をしてゐるのをツヒぞ觀たことがない。眉を寄せて、口を緊乎と結むで、眼を据えて儼然してゐる。

「ルーヂンさん、」と口を開いた。「私は一寸脱けて來たので、永くは居られませんから、掻摘むて申しますが、最う母は何も彼も存じ

て居りますよ。一昨日御眼に懸つたのをバンダレーフスキイさんが見附けて母に申したのださうて。昨日私は母に喚ばれまして……」

「ちよッ！　失策た！……」とルーヂンは叫んて、「て御母樣は何と仰しやいました？」

「別段憤つてもをりませんて、口汚なくも云ひませんてしたが、唯輕擧だと云つて小言を申しましたの。」

「唯それぎりてしたか？」

「而して貴君に娶せる位なら死んて呉れた方が可いと申しました。」

「え、そんなことを仰しやつたか？」

「はア、而してまだ母の申しますには、彼方はお前を貰ふ氣なんぞは些ともお有なさるんぢやアないけれども、たゞ退屈だもんだから一寸調戯つて御覽なすつたのだ。眞個に人は見懸に寄らないもんだ。尤も、然うは云ふものゝ、私も惡かつた、お前が彼方と數々お話をするのを打棄つて措いたのが失策だつたけれど、正可お前が其樣な大膽な事は爲まいと思つたから油斷してゐたのだ。眞個に呆れて物が云はれない……なんぞッて種々なことを申しましたよ。」

とナターリヤが一伍一什を話して聞かせたが、その聲が如何にも聲ぇない一本調子であつた

「それで貴孃は何と仰しやつた？」

「私ですか？　それよりか貴君は是れから如何しやうと思召して？」

「どうも情ない事になつて了つたなアー　どうも酷い！　まだ漸くお親しくなつたばかりだのに！　かうならうとは夢にも思懸けなかつた！……ぢや何んですね、御母樣は甚く御立腹ですね？」

「はア……どうも、最う貴君のお噂を聞くのも可厭だと申して……」

「そりや殘酷い！　其樣に御立腹ぢや最う到底も望は有りませんね？」

「到底も」

「何たる因果で此樣な思をするのだらう！　バンダレーフスキイといふ奴は可卑な奴だな！　貴嬢は如何すると仰しやるけれど、私は何だか眼が眩むで、最う無茶無茶になつて來た……洵に情ないと思ふより外何も思つてゐられない……貴嬢は如何して然う沈着いてゐられるかと思ふと、不思議のやうだ！……」

「私は平氣だと思召しますか？」

ルーヂンは堤を歩き出す、それを、ナターリヤは凝然と視てゐる。頓てまたルーヂンが。

「御母樣は種々なことをお聞きなすつたでせうね？」

「はア、聞きましてすよ……アノ私は貴君のことを眞に思つてゐるかと云つて。」

「で……貴嬢は？」

ナターリヤは急には答へなかつたが、姑くして、隱したつて仕樣が有りませんから、云つて了ひました。」

ルーヂンはナターリヤの手を把つて、「どうも貴嬢は潔白だ、實に大氣なものだ！　ほんに婦人の心といふものは――玉の樣だ！　けれども本統に御母樣は結婚は許らんと斷然仰しやつたのですか？」

「はア、斷然申しましたの。それといふのも貴君は結婚などなさる氣遣はないと思込んでゐるもんですから。」

「では私は貴嬢を欺したんだと思つてお居でなさるんですね！　實に情ないお見立だ！」

と云つて我と我頭髪を拶る。

「そんなことを仰しやつてゝは無益に時が經つて了ふばかりで……これッ切り最う目に懸れないやうになるかも知れないのですから……私は愚痴を漏したり泣いたりしに參つたのでは有りません――御覽遊ばせば解りますが、私は泣いては居りません――私は御相談に參つたのですから。」

「相談と云ふのは？」

「貴君は男子の事だし、しますから私は何でも貴君の仰しやる通りになりますよ、死んでも仰しやることには背かない積ですよ。ですから貴君も是から如何なさる思召ですか、それを仰しやつて下さいまし。」

「如何するといふのですか？……何でせうな、屹度最う私は御宅には居られないことに成るでせうな？」

「それは然うなるかも知れませんよ。昨日も最う貴君とは御交際は出來ないと申して居りましたから……けれども、私の伺つたことは！　貴君は何とも仰しやらないのだものを。」

「伺つたことゝは？」

「これから如何なさる思召だか……」

「如何すると云つて、他に仕樣も無いぢやありませんか？　諦めて了ふより外仕方がない。」

「諦めて了ふ？」とナターリヤが變に引張つたやうに言ふかと思ふと、唇が忽ち眞蒼になつた。

「是迄の縁だと思つて諦めるでさ。でも他に仕様がないぢや有りませんか？　それは成程辛い耐へられぬ程辛いには違ないけれど、私は貧乏です、其處を能く考へて見て下さい……それは働かうと思へば働けんぢやないが、假令金が出來たところで、貴嬢は御母様の勘氣を受けて家出をしてゐられますか？……到底もそれは出來ん事だ。ね、然うでせう？　だから到底も貴嬢とは一所にはなれない。私も今迄それぱかりを樂にしてゐたのだけれども、どうも私には然ういふ運がないものと見える。」

ナターリヤは急に手を顔に加てゝ泣き出した。ルーヂンは側へ寄添つて、言葉に力を込めて

「それぢや困る、ナターリヤさん。然うお泣きなすつちや私まで

辛い……どうも仕方が無いんだから諦めて下さい……」

ナターリヤは顔を揚た。見ると眼中が潤むで爛々としてゐた。

「諦めろ〳〵と仰しやるけれど私やそんな諦るのが厭で泣くのぢや有りません。それが辛いのぢや有りません、貴君を見損なつたのが悔しいのです……どうも！……こんな事になつて了つたのに、御相談を懸ければ最初から諦めろなんぞつて……能く其様な事が仰しやられましたね！　貴君は口でこそ自由だの犧牲だの仰しやるけれど、卒となると……」

最う言ひきれなくなつた。

ルーヂンは大きに弱つて、「いや、どうも、然うぢやない……私は何も持論に背く譯ぢやない……けれども……」

ナターリヤは更に憤然となつて、「母が死んだつて一所にはさせないと云ふ時、私は何と云つたと思召す？　私は其時他へ嫁く位なら死んで了ひますと云ひました……それに貴君は、仕方がないから諦めろなぞと仰しやつて……然うして見ると、全く母が申す通り、貴君は所爲がないので私をお弄り遊ばしたのですね？……」

「いや、決して然ういふ譯ぢやない……そんな貴嬢……」

と云つても爭かな聽いてはゐない。

「何故そんなら私の深入するのを止ては下さいませんでした？　何故貴君は御自分から……それとも故障は有るまいと思召しなのですか？　私や最うこんなことを口へ出して云ふのも恥かし

い……最う是迄……」

「まア少し落着いて下さい。如何したら宜いか、まア篤と考へて見んでは……」

「貴君は口癖のやうに犧牲々々と仰しやるけれど、それなら何故私はお前を愛するが結婚することは出來ない、これから將來は如何なるか請合はれないが、一所に來るなら來いと何故仰しやつて下さいません？　然う仰しやつて下されば私は貴君のお伴をして何處へでも參ります、如何な事でも致します。口で如何な立派な事を仰しやつても、行て爲さらなければ何の益にも立ちません。貴君は一昨日ワルインツオーフに彼樣に云はれても默つてゐらしつたが、今も臆してゐらつしやるに違ひ有りません。」

ルーヂンは面色忽ち朱を濺いだ。ナターリヤが思懸けず憤然となつて度肝を抜かれてゐたが、最後の一句を聞くとグッと、癪に障つたのである。

「大層逆上てゐらつしやる、然う逆上てゐらしては貴嬢は何程私に耻辱を與へたか御解りになりますまいが、落着いて考へたら、其内には少しは私の心も察しられるやうに成でせう。私は貴嬢を連れ去きたくないぢやない、それに貴嬢の仰しやるやうに、連れて去いたと云つて、私に何も迷惑は懸らんかも知れんが私の身に取つては貴嬢の御身の安泰といふことが何よりも大切です。それを……ソノ……貴嬢の何を奇貨にして、そんなことをしては私が濟まん……」

「成程、それは貴君の仰しやる通りかも知れません。私は何を云つてゐるのか、宛て夢中ですから……ですが、私は今迄貴君の仰しやることを一々本統にしてゐましたが、これからは物を仰しやるなら口頭ばかりで仰しやらずに能く考へて仰しやいまし。私は一旦貴君の事を思ふと言つたからは、其覺悟でゐました、如何なる事でもする積でゐました……けれど、今となつては最う仕樣が有りません。お蔭さまで善い修業を致しました、難有うございます。左樣なら御機嫌よう。」

「まア、一寸待つて下さい。一寸、何卒ぞ。どうも貴嬢は甚く輕蔑なさるけれど、私は然う貴嬢に輕蔑される覺はない。まア、貴嬢も私の身になつて一つ考へて見て下さい。ナニ私は貴嬢の身に就

いても私の身に就いても責任を負ふのを厭はせんから、若しも私が深く貴嬢を愛してゐないものとすれば、私は直ぐ貴嬢を連れて退きます……御母様だつて何時までも御立腹なすつても居らつしやるまいから……然うすれば……けれども、自分の事を思ふよりも先づ……」

と云ひかけたが、云ひきれない。ナターリヤが直と面を目守めてゐるので、どうも極が悪い。

ナターリヤは「貴君は悪意がないと辯解をなさるけれど、それを私は疑ひは致しません。それは貴君は何も悪意が有つて爲すつた譯ぢやないでせうが、そんな事は伺はんでも存じて居ります私はそんな事を伺ひに參つたのぢや有りません。」

「どうも意外な事になつて來た。貴嬢は……」

「然うでせう、然うなんでせう！　貴君は斯う成らうとは思召さなかつたでせう——私を御見損なすつたのでせう。いえ、それなら、御心配遊ばしますな、貴君がお厭なものを無理に私の事なぞを愛つて下さいとは申しませんから。」

「いや、愛はんとは云ひません！」

ナターリヤは儼となつて、

「然うて御座いますかでも貴君のやうな愛ひ方では、愛はないのも同じ事です。私は貴君の仰しやつた事は一々記臆してゐますが、貴君は双方が同等の人物でなければ愛は成立たんものだと仰しやつたことが有ります……成程貴君は私から見ればズッと

優勝い方ですから私には勿躰ないのでせう……そんな思をするのも當然な事なんでせう。貴君はこんな降らない事に拘らつてはゐらつしやられますまい。私は今日の事は一生忘れませんが……左様なら……」

「何處へお往なさる？……ナターリヤさん、こんな事でお分缺申すんですか？」

と手を出したが、其言方が如何にも訴へるやうで哀てあつたので、ナターリヤも流石に心が動いたと見えて立止つた。

頓て、「何だか私も悲しくなつて來ました……本當に此處へ來たのも、お話をしたのも、宛て夢中ですよ。少し落着きませう。かうして了つては不可ね、貴君も斯うはさせないと仰しやる所だ

から本當に、私は家を出る時、最うこれが見納だと思つて、蔭ながら乞暇をして來たのですよ。それだのに來て見れば、貴君は其樣な小膽な事を仰しやつて……てずが、如何して私には家出をして苦勞をするとが出來ないと思召したの？「御母樣が不承知……情ない事だ！」そんな事のほか貴君は何も仰しやらないのですものを。貴君は正可其樣な方ぢやないと思つたら……けれども、今更其樣な事を云つても仕方がないから、最うお分れ申しませう……あゝ、若し貴君が本當に私の事を思つてゐて下すつたら、私は今此樣な思をしなかつたらうになア……だが、もう其樣な事を云つても仕方がない。左樣なら！……」

ナターリヤは急に身を轉じてマーシャの居る方へ駈出して行

つた。マーシャは疾くより心配をして手招をしてゐたのである。

「私ぢやない、貴嬢が臆してゐるのです。」とルーヂンは後から呼懸けた。

けれども、最うルーヂンの云ふ事などは耳にも懸けず、匆々と野を横に家路を辿つた。首尾克く寐間まで來たが、閾を跨ぐと其儘氣を失つてマーシャの腕へガックリ倒れかゝつた。

ルーヂンは久らく堤の上に立つてゐたが、頓て慄然と胴震をして、徐々小徑へ出て、静にそれを辿つて行つた。大に辱しめられて……少し忌々しいやうな心持もする。肚の裏で、「まア、如何だらう？　十七であれだ！　いや、吾は見損なつたのだ……えらい女だ。意力の強いとは！……成程ナターリヤの云ふのが道

理だ。彼女は吾の愛つてゐたやうな事では不足だらう……愛つてゐたと？」と自問して、「では最う吾は愛つてゐないんだらうか？　えい、どうせ終局は此樣な事だ！　眞に吾は彼女から見ると情ない程可卑な男だなア！」

馬車の輕く軋る音が聞えたので面を揚げて見ると、向ふからレジチフが例の馬を御して來る。默つて辭儀をして分れてから、ふと何か心附いたやうな面をして横道へ入つて急足にダーリヤの住宅へ戻つた。

レジチフはルーヂンの行く後姿を見送つてゐたが、少し考へて、馬の首を回して、ワルインツオーフの家へ戻つて來た。昨夜は其處に泊つたのである。來て見ると未だ眠てゐるので、其儘そつと

して置いて觀樓へ出て烟草を喫しながら、茶の時刻になるのを持つてゐた。

（十）

ヴルインツォーフは十時に起きたが、レヂネフが觀樓に居ると聞いて、大きに驚いて、部屋へ呼んで、

「如何したんだ？　歸ると云つたぢやないか？」

「然うさ、歸らうとしたんだがね、途中でルーヂンに遭つたんだ。野を歩いて來たつけが、見るも氣の毒な面をしてゐるんだ。それを見ると僕も不圖歸る氣になつたんだ。」

「ルーヂンに遭つたから歸つて來たのかい？」

「といふが、實は、何故歸つて來たんだか、僕にも解らない。大方君の事を憶出して、復たお饒舌を仕たくなつた、とでもいふのだらう

さ。けれども家へ歸るには未だ早いよ。」

ワルィンツォーフは苦笑をした。

「然うさな、ルーヂンの事を思ふと、僕の事をも思はずには居られなからうな……誰ぞ居らんか？」と高く叫んで、「茶を持つて來い。二人で茶を喫むで居た。レヂネフは農談を始めて、穀倉を紙で張る新法か何かの話を仕出すと……

ワルィンツォーフは不意に躍上つて、大い腕力を出して卓を破と擊つたから、皿も茶碗もガチャ〳〵と鳴つた。大きな聲で、

「いや、最う如何しても勘辨ならん！　僕は彼奴に決鬪狀を付けてやる。僕を擊殺すなら擊殺すて宜しい、僕は彼奴の學者然とした顏に鐵砲丸をお見舞申さなきや措かん。」

レヂネフは故と落着いて、「頼むぜ〳〵！　最う些と靜にしないかい！　お蔭でパイプを落した……如何したんだい？」

「僕は最うルーヂンと聞いたばかりでも、平氣ぢや居られん。全身の血が沸返るやうだ。」

「何を云ふかと思つたら愚痴」とパイプを拾つて。

「打棄て措くさ彼樣な奴は……」

「だつて僕に恥辱を與へたのだもの、」と部屋の内を歩き出して、「何でも恥辱を與へたに相違ないさ。そりや君も然う思ふだらう。初は方角が附かなかつたから僕もツイ放心してゐたんだ――誰だつて又彼樣な事を云つて來やうとは思はんだらうぢやないか？　けれども、僕は愚弄されたと氣が附いちや其分にや濟されん

……彼哲學者の畜生を鵠鴿か何ぞのやうに撃殺して遣るから待て。」

「至極好からう！　そりや姉さん何ぞは如何でも宜いさ。君は今逆上てゐるのだから、姉さん何ぞの事を思つちや居られなからうが、併し最う一人の人の事を云ふだが、如何だい、哲學者を撃殺したら、舊のやうに成るだらうか？」

ワルインツォーフは肘懸椅子にドッサリ腰を掛けて、「そんなら何處旅をして來る！　此所に居ちや、糞忌々敷つて〳〵如何も斯うもならん！」

「旅をする……そりや別問題だ！　そいつア好からう。そこてト、僕が好い事を思附いた。如何だい、一所にカフカーズへ往かうぢやないか、それとも小露西亞へ行つて名物の餅を喰ふのても可い。屹度妙だぜ！」

「然うさ、けれども、姉一人留守番に置いて行く譯にもいかんな。」

「連れて行つたつて可いぢやないか？　屹度面白い。姉さんの世話は僕が引受ける、決して不自由はさせない。若し御所望とあるなら、毎晩窓下で音樂を奏らせて、御者を香水臭くして、路傍に花を挿しても苦しくない。僕等は僕等で屹度變生つたやうになるね。それて散々保養をして腹が大きくなつて歸つて來りや、戀も糞も有つたもんぢやない！」

「そんな串戲を云つちや不可。」

「いや串戲ぢやないよ。君の思附は全く妙だよ。」

「いや不可！」とツルィンツォーフは又聲を張揚げた。「僕は如何しても決鬪する！」

「また其樣なことを云ふ！　今日は餘程如何かしてゐる！……」

僕が手紙を持つて入つて來た。

レヂネフはそれと見て、「何處から來たんだ！」

「ルーヂンさまからの御手紙で。ダーリヤさまの家の僕が持つて參りました。」

「ルーヂンの手紙？　誰の所へ？」

「旦那樣の所へ參つたので御座ります。」

「え、己の所へ……此處へ持つて來い。」

ツルィンツォーフは引攫むやうに手紙を取つて、狼狽て封を押切つて讀出した。

其面をレヂネフが凝然視てゐると、驚いたらしい中にも何處にか嬉しさうな所も見えて、頓て手を措いたから、

「如何したんだい？」

「まア讀んで見給へ、」と聲低に云つて手紙を渡した。

レヂネフが讀むでみると手紙は此樣な文面であつた、

拜啓。小生事本日ダーリヤ氏の家を辭し去り申候。最早再び歸り來るまじと存候。昨日申上たる事も有之候へば、或は不思議なる事に思召さんか。何故にかゝる事を貴兄にお知らせ申すにか我にも胡論に候へど、唯何となくお知らせ申さねばならぬやう被存候も不思議に候。貴兄は小生とは意氣相合はず剩

へ小生をば惡むべき人物のやう思召され候ことも善く承知致居候へど、御目がねの違へるや否やは程を經なば自ら瞭然たるべきことゆゑ、唯今は強て辯解不致候。且つ小生の見る所を以てすれば、先入主となりたる人に對し、その先入の見の謬れる由を論ずるは無益の業にて、男兒の宜しく爲すべき事にあらず。小生の意を解する者は小生を咎めざるべく、小生の意を解せんことを願はざる者、若くは解することを能はざる者などが如何樣に誹謗致候とも小生の少しも疚しとする所にあらず候。小生は貴兄を見謬り申候。固より只今とても小生の眼中に於て貴兄は鄙陋の念とては半點も懷き給はざる立派なる御方に相違なけれど、最初は今少し立上りたる方かと存候ひき。併しながら斯る過を仕出たるも全く小生に人を見るの明なき故に候へば、今更何とも致方無之且つかゝる事は今に始りたるにてもなく、又此度に終りたるにてもあるまじく候。かやうに急に出立致すやうに相成候については謹で貴兄の清福を祈り候。こは眞心より申す所に候へば、疑ひ給ふべからず。貴兄は是より定て幸福ならんと存候、かくて時をだに經ば小生を見給ふ眼にも自ら變化あらんか。今後再會は期し難く候へど永く高風を欽慕して敢て忘るまじく候。敬具。

ドミートリー、ルーヂン

二白。恩借の二百ルーブルは歸郷次第返辨可致候。又此書面を差上候事はダーリヤ氏には内々に願候。

何又かやうの仕誼に相成候からは先日參堂致候ことをナタ
ーリヤどのに御吹聽被下間敷候。これは最後の願に候へど、等
閑ならぬ仔細有之候事と御了知可被下候。

レジネフが手紙を讀了るや否や、ワルィンツォーフが、

「君は何と思ふ？」

「何と思ふと云つて、東洋風に呀と云つて、口に手を加る外仕樣が
あるもんか。發て行くなら、其迄の事だ……おさらば〳〵だ。
けれども、此處が妙だね、何ても此手紙を書くのを義務の樣に思つ
てゐるんだ、君の所へ來たのも矢張それなんだ……彼連中は歩
行くと義務に躓くんで、それ義務、やれ義務なんだ。」

となほ〳〵書を示しながら苦笑をする。

ワルィンツォーフが「それも然うだが、此文句は如何だらう！　何
だか僕を見謬つた、僕は最う少し立ちあがつた人物かと思つたと
書いてある……何をべらぼうな、詩よりも降らない！」

レヂネフは何とも云はずに眼に微笑を湛へてゐる。

ワルィンツォーフは起上つて、「これからダーリヤの家へ往つて
來やう。何が何だか仔細が解りやァしない……」

「まア待ち給へ。今往つちや、彼奴も逃る暇が有るまい。彼樣な
奴と衝突したつて詰らんやアね。此土地に居なきや、言草はない
さ。それよりか、まア些と横になつて休み給へ。昨夜は夜中臥返
ばかり打つて居たぢやないか？　最う是からは此方のもんだ：
……」

「何故此方のもんだ？」

「まアさ、然う僕に思はれるのさ。まア、眠たまへ。僕は姉さんの所へ行つて、お饒舌を仕て來る。」

「些とも眠むくない。眠たつて詰らん……それよりか田圃でも巡つて來やう。」

と外套の裾を引張る。

「それも宜からう。そんなら、往つて一巡り巡つて來給へ。」

レヂネフはアレクサンドラを尋ねて見ると、客間に居たが、相變らず愛想が善い。アレクサンドラはいつもレジネフが來ると喜ぶ。けれども今日は少し面色が悪いが、これは昨日ルーヂンが來たので、それが如何も心配てならぬからてある。

「今まて彼方てしたか？　如何な樣子てす今日は？」

「いや、心配な事は有りません。今田圃巡りに出懸けました。」

アレクサンドラは默つて了つたが、久らくすると、おろし立の手巾の緣を熟々視ながら、「彼方て何か話が有つたてせうが、一體何の用て……」

「ルーヂンが來たてすか！　それなら、なに暇乞に來たのてす。」

アレクサンドラは面を振揚げて、

「え―暇乞に？」

「然うです。貴女は未だ御存知ないのか？　最う故郷へ歸るんださうです。」

「歸るつて？」

「最う二度と來んてせう。と、まア、自分では云つてゐる。」

「まア、如何もをかしいぢや有りませんか？　彼樣に大事にされて居たのに……」

「然う云や成程をかしいかも知れんが、併し實際の話です。何か事が起つたんてせう。餘り行り過ぎたもんだから、檻樓が出たんだ。」

「まア、如何も！　私にや何だか些とも譯が解りませんね……欺ぐんぢや有りませんか？……」

「いや、全くです。全く立つと云つて、皆の所へ加之手紙て知らせたさうです。尤も彼男が居なくなつて都合の好いことも有るが、お蔭て折角ワルィンツォーフと相談しかけた素晴しい企畫が如

何やらフイになつて了つた。」

「如何な、企畫と云つて？」

「斯ういふ話さ。私がワルィンツォーフにね、保養のために、貴女をもお誘ひ申して、旅行しないかと云つて勸めてゐたんです。貴女のお世話は私が引受けることにして……」

「それは結構！　さぞ善くお世話して下さる事てせう。大方餓死でも爲せられるのが結局さね？」

「貴女は私を善く知らんから、其樣なことを仰しやるんだ。屹度私の事を極の頓間で木を伐つて放出したやうな人間だと思つてるんてせうが、私は斯う見えても砂糖のやうに溶けろと云へば、溶けもするし、又何時までも膝を突いてゐろと云へば、隨分突いても

合點するから……」

アレクサンドラは抑留やうとしたが、レヂネフは敏捷く逃出して、帽子も冠らずに園の方へ往つた。而して角門に倚懸つて何處ともなく眺めてゐると、

背後の方から小間使の聲がして、

「レヂネフの旦那樣！　奥樣が一寸貴君に入らしつて下さいと仰しやつて、」

レヂネフは振返りざまに小間使の首に絡着いて、額に接吻して、アレクサンドラの所へ行つた。や、小間使の驚くまいことか！

ゐるが、それは解らんてせう？」

「一度然ういふ所を拜見したいもんですね。」

レヂネフはふと起上つて、「そんなら私と結婚なさい、悉皆お眼に懸けるから。」

アレクサンドラは耳の附根まで赧くして、

「何を仰しやるんですよ！」

と極り惡さうな風でゐる。

「これは疾うから云はう〳〵と思つてゐた事だが、到頭云つて了つた。併し如何とも御心次第です。側に居ちや氣詰りだらうから、私は戸外へ出ます。貴女に思召がなければ……其儘歸りますが、若し思召が有るなら、呼びに遣して下さい、然うすりや然うと

《十一》

ルーヂンはレヨ子フに別れてから程なく家へ歸ると其儘、部屋に閉籠つて、ワルィンツォーフへ贈るのとナターリャへ贈るのと二通手紙を書いた(ワルィンツォーフへの手紙は讀者御存じの通りである)。ナターリャへの手紙は消すやら改すやら久しく掛つて下書を書いて、之れを薄い書翰紙に丁寧に寫改して、成るだけ小さく折つて隱袋へ入れた。憂鬱な顏をして部屋の中を幾回となく往きつ戻りつしてゐたが、頓て窓際の長椅子に腰を掛けて頰杖を杖くと、睫毛が泪に潤むだ……起上つて、僕を喚んで、ダーリヤに逢ひたいから都合を聞いて來いと命ける。

程なく僕が歸つて來て、差支ないと云ふから出懸けた。

ダーリヤは書齋でルーヂンに會つた。二箇月前も此書齋で會つたのであるが、今日は一人ではなく、バンダレーフスキイが相變らず瀟洒した見綺麗な風をして慎ましげに座つてゐる。

ダーリヤは愛想好くルーヂンを迎へ、ルーヂンも亦愛想好くダーリヤに會釋したが、雙方の莞爾した面を見ると、左程世馴れぬ者でも、直ぐどうも表面は至極美しいけれど、底意に變な所が有ると思はれる。ダーリヤの腹を立てゝゐるとはルーヂンも承知してゐるし、ダーリヤもまたルーヂンは最う何も彼も聞いて知つてゐるだらうと思つてゐる。

ダーリヤはバンダレーフスキイのお訴訟を聞て大に立腹した。

から踏付にされては世間に顔出がならぬといふみえ氣が先づむくむくと頭を擡げる。どうも貧乏人で、官位もない癖に、それは傑いかも知れぬが、まだ一向名が聞えてゐるでもない癖に、身の程をも顧みず、このダーリヤ、ミハイロウナ、ラスンスカヤの娘たる者を引出して逢引をするとは怪しからん!! と先ァいふ氣になる。

で、此樣なことを云つた、「それはルーヂンはなか〳〵如才がない俊才だらうさ。だが、それだからと云つて此樣なことをされちや困るぢやなからうか。俊才だからと云つて婿にしたら、皆婿に仕なきやならないわね。」

パンダレーフスキイが引取つて、「手前は現在視たとて御座りまするが、どうも僞らしく思はれて成りません。どうも分際を知

らんにも程の有つたものて、いやはや驚入つた事て御座りまする。

て、ダーリヤは甚い立腹、それが爲にナターリヤも大きに痛付けられた。

ダーリヤはルーヂンに座を勸めた。ルーヂンも座りは座つたが、從來の樣に主人顔もせられなかつた。極く懇意の人といふ程にもいかぬ。如何にもお客樣で、それも餘り親しくないお客樣でゐる。瞬く間に斯う成つて了つたのだが、水が俄に凍つてコチコチした氷になつて了ふのも丁度斯樣な鹽梅である。

ルーヂンは口を開いて、「えゝ、永々御厄介になりましたが、先刻國元から手紙が來まして、今日中に出立致さなければならんやうな都合になりましたから、それで一寸御禮に……」

ダーリヤは凝然とルーヂンの面を目守めて心の中に、「先を越したよ。大方威附いたんだらう。厭な思を仕ないて濟んで、まア好かつた。それだから怜悧者は繁昌するのさ！」と思つたが、口へ出しては、

「おや、まアいけませんねえ！　だが、どうも仕樣がない。此冬又マスクワでお目に懸かれるでせうね？　私も其内に參る積りですが……」

「マスクワへは參られるか如何だか知れませんが、若し參られたら是非伺ひませう。」

パンダレーフスキイはパンダレーフスキイで、「如何だい、ツヒ昨日まで此家の主人のやうな面をして居た者が今日は此爲體だ！」

と肚の裏では思つたが、口へ出しては、例の調子で、

「では何で御座りまするか、お國元に何か面白からぬ事でも起りましたので？」

「然うです」、とルーヂンは素氣なく答へる。

「不作でゝも御座りまするので」

「いや……然うぢやないです……」改てダーリヤに向つて、

「どうも永々御厄介になりました。御厚情は忘れは措きません。」

「私こそお相識になりまして大層面白い想を致しましたから、なかなか忘れる事では御座いません。が……何日お立ち遊ばしますの？」

「今日晝過にしやうと思ひます。」

「まア急な事て御座いますね……ては折角道中お氣をお附け遊ばして……尤も餘りお手間が取れませんやうでしたら、またお出下さいまし、それまては未だ此處に居る積て御座いますから。」

「難有うございますが、どうも然ういふ譯に參らんかも知れません」と起上つて更に言葉を改めて、「それから甚だ申しかねますが、恩借の金子は唯今直にと申す譯にもなりませんから、いづれ國に歸りましたら早速……」

と云ひ終らぬ内に、

「あら、まア、何て御座いますよ、ルーヂンさん！　そんな御心配をなすつちや不可ませんよ。だが、最う何時だらうね？」

と問はれてパンダレーフスキイは胴衣の隱袋からエナ・メル附の金時計を出して桃色の頰が堅い白の襟を壓すのを厭ふやふにして徐と眺めて、

「二時と三十三分て御座りまする。」

「ては最う着改へなければならない。それては、ルーヂンさん、復た後刻に……」

ルーヂンは起上つた。二人の咄工合は誠に妙てあつた。俳優が臺詞を復習ふのも外交官が會議に臨んで豫備の文句を並べるのも恰ど此樣な鹽梅てある。

起上つて座舗を出たが、此時始て交際社會に立交る人が不用になつた者を棄るのには打棄る程の手數もせず、ほんの取遣すのて宛て夜會過ぎての手袋、菓子の包紙、外れた富札と同樣な待遇をす

るといふことを悟つた。

匆々に旅仕度をして、むづ〳〵しながら出立の時刻の來るのを待て居ると、出立と聞いて家内の者は皆驚いて、婢僕までが不審の眼を注ぐ。バシストフは頭から別を惜むでかゝり、ナターリヤは人目をも憚らず公然に逃げ廻つて、成るべく眼を視合さぬやうに構へてゐたが、それでもルーヂンは辛うじて手紙だけは渡した。

食事の時にダーリヤは重ねてマスクワへ上る迄には最一度會ひたいと云つたけれど、ルーヂンは何とも返答をしなかつた。バンダレーフスキイは人よりも餘計にルーヂンに物を云懸けたが、ルーヂンは此男の得意らしい紅顔を視ると、飛蒐つて打倒したく思ふことも幾度か有つた。M-lle Boncourt は何か擽たいやうな可異

な眼付てルーヂンの面をじろ〳〵視てゐた。年功を積んだ悧悟な探犬は如何かすると此樣な眼付をすることがある。眼が物を云つたら、「そら見たとか！」とでもいひさうである。

頓て四時が鳴る、馬車の支度も出來る。そて皆の者に匆々に告別をしたが、誠に厭な心持がする。之では宛て逐出されるやうなものである、かうして此家を去らうとは思はなかつた。強て笑顔を作つて右左に會釋をする時心の中で、「考へて見れば果敢ないものだなア！　先を急いて來て見れば、こんな事だ！　併し世の中の事は皆此樣なものか」、と思つた見納と思つてナターリヤの面を視ると、恨めしいといふ中にも何處か名殘惜しさうな所も有る、悲しい眼付て凝然と視てゐたので、ルーヂンも流石に胸は一杯

になつた……

足疾に玄關を降りて、身を躍らして馬車へ入つて了つた、バシストフはステーションまで見送りたいと云つて合乘をして。

馬車が邸内をヨウカの兩側に植わつた廣い往來へ出ると、ルーヂンが、

「ねえ、バシストフさん！　ドン、キホートが公爵夫人の邸を出る時家來のサンチョーに向つて、「自由といふものは天から人に與へられた物の中で一番貴いものだ。人のお蔭を蒙らんでも飯の喰へるものは福人だ！」と言つたことがあるが、私も今恰ど同じやうな感がある……貴下も何時か一度かういふ目に逢つて御覽なさい、そりや屹度發明する。」

バシストフはぢつとルーヂンの手を握締めた。正眞な男であるから同情に打れて頻に胸が波立つ。ステーションへ着くまでルーヂンは人の人たる所以、眞の自由の貴き所以を熱心に說き立てゝ、隨分高尙なことも道理なことも云つた。卒分袂といふときバシストフは耐りかねて、ルーヂンの首にしがみ付いて泣出したので、ルーヂンも泣きは泣いたが、併しバシストフに分れるのが辛くて泣いたのではない。彼の泪は利己の涙であつた。

*　*　*

ナターリヤは部屋へ入てルーヂンの手紙を讀でみると、其文に、

一筆書殘し申候。　さて私事他に詮方なく候まゝ、あからさまに立退くべきやう御沙汰なきうち、我より身を引き申候私だにを

らず相成候はゞ、何事も丸く納るべく、また私ごときもの身を引き候とも、誰一人惜むものもあるまじと存候。なを留りをり候へばとて、何とか相成り申すべき。任他かゝる文をまいらせ候は、今お別れ申候ときは、再び御目に懸るともあるまじく候へば、身に覺えなき惡名を被むりたるまゝにてあらむこと、如何にも殘念なるからに候。固より我罪を言釋かむとおもふにてもなく、また我より外に誰をも怨むとにはなく候へど、我筆の廻らむほどは、事の情を聞え奉らまほしう候、誠に此頃の事どもは、あはたゞしう思ひ設けざる事のみにて、まだしみ〳〵物打聞えまゐらすることもなかりしを……

今朝しも御目に懸りたるは身に取りて好き修業となり申候。

こは一生忘るまじく候。仰せられ候ところ一々御尤にて、成程私は御許樣を知らず、たゞ知りたる樣に思ひあやまり候のみ。これまでさま〳〵なる人に交り、あまたの婦人に親しみたれど未だ御許樣の如く心ざまの清く正しき人に遭ひ申さず、人といふものは皆淺墓なるものゝやうに思ひ貶しめ候から、遂に御許樣をも見損ぜしにて候。はじめて御目に懸りし時より、私の御許樣に心ありたるは御心附の事なるべきか。されど毎度御咄を致しながら、御心をえ知らず、或は知らむともせざりしやも知れず、さるを身に代へて慕ひまゐらせたりなど思へるぞ、かへすがへすも淺墓なりし。さるからに今此身になりて此思を致し候にこそ。

前かたさる婦人を懸想せしと有之候ひしが、これは必ずしも片思にてもあらざりしやうに候、其時の我思は誠に込入りたるものにて、尋常の戀にはあらざりしやうなれど、懸想せられし人も同じやうなる心なりしゆゑ、まづは似つこらしとも申すべきにや。其折は遂に事の情をえ悟らずして已みにしが、其後ふつに打絶え候ても、なほ戀人の人となりをえ知らず、程經てやうやう知り得たれど、其時は既に晩かりし……されど遂事は追ふべからずとかや。苦樂を共にせむとおもはゞ、共にするを得べきやうにして、遂に意に任せぬ身なれば、是非なき事に候。かやうに眞に人を慕ひ得るや否や覺束なき身に候へば、何として眞の情愛を傾け、妄想ならて信實に御許樣を慕ひまゐらせたりな

ど口廣く申すことを得べきや。

私は天分薄きものにはあるまじく候。これは私も善く心得をり候ところなるを、愧づまじきとを愧ぢて謙退ぶらばをかしかるべく殊にかく口惜しく耻かゞやかしき身の上となりたる私には一倍をかしかるべしと存候へば、包まず申上候。されど私は力相應の事は何もえせず、何一つ仕出てたる事もなくて果つべきものに候。天分ありとも何の益にも立たず、種を蒔きたりとて何も生ゆまじく候。私には……何が不足せしともえ辨へず候へど……何か人の心を動すべきもの取分けて婦人の思を惹くべきもの不足しをるかと存ぜられ候。唯人の智のみを傾するは果敢なく無益しきことにて候。熱心に身をも心

をも打込めむと存候へど、打込むること叶はず、おもへば怪しくおかしき運命に候かな。多分は心にもなき果敢なき戯のために命を捨つることなるべきか。あはれ、三十五歳にもなりて、尙ほ何をか爲さむとおもふよ。おかしき事に候はずや。

かゝることは未だ誰にも打開けたることなく候。これ懺悔ぞと御聞取下さるべく候。

されど私の身の上は多く言ふを須ゐず、これより御許樣の御身の上につき、存寄候ところを少しく申上ぐべきが。かゝるとの外に何の益にも立たぬ身こそつらく候へ……さて御許樣はまだうら若き御身のおひさきも永くおはしませど、常に情に聽きて智に聽き給ふべからず。人の境涯は狹く單純なるほど

宜しく、假令目覺しき事はなくとも、萬事自然に推移するが肝腎に候。若き時より若き者は幸なりとこそ承り候へ……されどかゝる誡は御許樣よりは實は私に適切なるやも知れず候。

有樣を申候へば私は今甚だ心苦しく候。固より母君の私を見給ふと甚だ重しとはかけても思ひ候はざりしが、兎も角も假の宿を見附けたりと思ひをり候ひしに、又も江湖にさすらふ身の上と成果て申候。御許樣に差向ひ、四表八表の御物語をいたし、賢しげに油斷なき御目元を見まゐらするうれしさに、又いつの世にかは逢ひ申すべき。何事も身の愚かなるより起り候なれど、何となく運命のために弄ばれたらむやうなる心地もいたし候。一週前までは露慕ひまゐらせしとは思はざりしを、一昨

夜庭にて御許様の……されど其時仰せられしことを今此に繰返へす要なかるべくや。御許様にはあのやうに罵られ、此世にかくる望もなくなりて、耻を含みて今日出立いたし候へど、私の如何ばかり御許様に罪負へるかは、まだ測り知り給はざるべし。私は愚かしきまて打開けたる質にて、しかも口數さへ多く候へば……されど今かゝる繰言を申したればとて、何の甲斐か候べき。兎に角今お別れ申候はゞ、最早再び御目に懸ることもあるまじと存候。

（此處てワルインツオーフを音問たことを書かうかと思つたが、思返して消して了つた。それでワルインツオーフへの手紙には尙又を書添へたのである。）

私は今便なき孤立の身と相成申候。これより果して何事をか致すべき？　身に相應せる事業に就けとて、今朝は酷く御嘲りなされ候へど、悲しいかな、私は生來の懶惰に克つと能はず、所謂事業に精神を打込むること出來ず候へば、矢張これまで通り何處やら物足らぬ所あるものにて一生を終るべしと存候。聊かなる故障に遭へば、忽ち氣沮みて志を挫くこと、今度の事之を證して餘りあるべく候。若し將來の事業のために、戀を捨てたるにてもあれば、稍自ら慰むる所も候はんが、私は唯身に掩懸らむとする責任を懼れたるにて候。誠に私の如きは御許様の偶にあらず、家出をおさせ申すほどの價値私には無之候。されど又思返せば、かやうの事も反て身のためにならむも知れず、私も

苦しき思を歴來りたれば、心の垢自ら去りて意氣復壯になることも可有之か。

御身の上に幸あらむとを祈り候。さらば健かにあらせ給へ。をりふしは私がことをも思し出し下さるべく候。なほ私の身の成果は風の便に聞知り給ふこともおはしまさむ。かしこ。

ナターリヤはルーヂンの手紙を膝に措いて、凝然と床を目守めたまゝ、久らくは身動もせずに居た。今朝がたルーヂンに分れる時思はず聲を揚げて貴君は私の事を思つては下さらないと云つたが、實に其通りて、此手紙が何よりの證據である。からとて少しも心を慰める足にはならない。身動もせず坐つてゐたが、何やら浪のやうなものが眞黒になつて音をも立てずに頭の上へ蔽さつ

て來たやうて、慄然と身躰も冷固まつて、底の方へ沈むて行くやうな氣がする。誰にしろ始て失望した時には辛いものてはあるが、輕舉みもせず、過大にも云はず、ちやんと眼を開いてゐて、深く思込むだ者の身になつては殆ど耐へられぬ程辛いものてある。ナターリヤは幼い時の事を憶出したが、子供の時には夕方散歩に出ると、暗い方に背いて、天の一方が夕照に赤々と見えるその方へ〳〵と行きたがつたものてある。それだのに今は光明を背後にして闇へ向つて行くやうな氣がする……

ナターリヤは泪ぐむだ。泪を落せば常も樂になるとは行かぬ。胸が一杯になつて、耐へかねて漏した泪は初は苦くても次第に快く樂に流出て、聲をも立てずに胸を責めてゐた悲みがこれて外へ

泄れて了ふから、幾分か心をも慰め氣をも安める便りとなるが、悲しみが盤石でも載せたやうに胸を壓付て一滴々をと絞出した勢の無い冷い泪は漏れても氣も休まらなければ、樂にもならぬ。此樣な泪の出るのは誠に餘儀ない譯からて、之を漏した者でなければ、まだ眞の薄命者とは謂へない。ナターリヤは今日といふ今日始て此泪の味を知つたのである。

二時ばかり經つてから漸く氣を取直して、起上て泪を拭いたが頓て蠟燭に火を點じて、それに翳してルーヂンの手紙を燒いて、燒壺は窓から捨てゝ了つた。それから卒然プーシキンの詩集を開げて初に目に觸れた句を讀むてみると、

こひせし人の哀れさは　いつまて草のいつまても

かへらぬむかし歎たれて　浪たちさはぐ心には
花も紅葉も映らめや　只一筋にくやしくて
落る泪は干さじぞと

とあつた。いつも占はかうしてするのである。暫く立住むてゐたが、頓て鏡を覗いて冷に微笑して、何か頷いて客間へ降りて行つた。

ダーリヤはナターリヤの面を視ると直ぐ、居間へ連れて行つて、自分の側へ坐らせて、莞爾しながら頰を輕く擊き抔したが、それでも何か珍しさうに凝然とナターリヤの眼を目守めた。實は生れて始て自分は未だ娘の心は洞察いてはゐないやうだと思つたので、内々不思議に堪へぬのである。ナターリヤがルーヂンと媾曳

をしたことをパンダレーフスキイに聞いた時には、立腹したといふよりは、寧ろ如何して彼樣な怜悧な娘が其樣な事をする氣になつたらうと吃驚したのであつたが、ナターリヤを呼寄せて、小言を言つて見ると――それが又歐羅巴の婦人らしくもなく、隨分口汚なく叫いたのであるが――言つて見ると、案外斷然した挨拶をして、眼付を見ても、所爲を見ても、決然覺悟をしてゐるやうなので、少し方角が違つて、薄氣味惡くなつた程であつた。

ルーヂンが突然に發つたので、理由は判然しないが、兎に角眼の上の瘤が除れた樣な心持がするけれど、定めて泣きもされやう、ヒステリーでも起して氣絶もされ樣と思つてゐたのが、見た所まづナターリヤは平氣でゐるので、復た方角が附かなくなつて來た。

「どうだね、如何な心持がするね？」

と云ふと、ナターリヤは母の面を凝然と觀詰めた。

「發つて行つたのぢやないか……彼人がさ。何故斯う狼狽て發つたのだか、お前は知つてゐるのかい？」

ナターリヤは低い聲で、

「母樣！　貴女さへ彼人の事を何とも仰しやつて下さらなければ、私は最う屹度噂もしません。」

「然うして見ると、お前は濟ない事をしたとも思ひのかえ？」

ナターリヤは俯向いて、

「最う屹度噂もしません。」

と同じことを二度云ふた。

ダーリヤは莞爾して、

「これからは些と氣をお附けなさいよ。私は今迄通りお前さんを信用するから。一昨日はまア如何だつたらう、お前は……だが、最う止さうね。濟むだ事は濟むだ事で、水に流して了はアね。ね？　此樣なら矢張舊のお前だけれど、あれぢやお前、誰だつて呆れて了はアね。まア、接吻ても爲さいなー……」

ナターリヤは母の手を執つて、唇に接けるダーリヤも娘の屈めた頭に接吻した。

「是からは一々私の云ふ通りにお成りよ、決してラスンスカヤの娘といふことを忘れてはなりませんよ。然うすればお前も幸福てゐられるのだから。さア、最う用は濟むだから、彼方へお出て。」

ナターリヤは何とも云はずに出て行く。其後姿を見送つて、ダーリヤは肚の裏で、「矢張私に似てゐるんだよ。乾度是からも苦勞するだらう。と思つたが、それから昔の事を憶出して凝然と考込むだ……尤もズット昔の事てあるが……

久くして M-lle Boncort を呼寄せて、戸を締切つたまゝ、二人て長い間話をしてゐたが、頓て之をも放げて、バンダレーフスキイを呼寄せた。どうもルージンの發つた眞の理由を知りたくてらぬのてある。けれども、バンダレーフスキイの事てあるから全然氣の落着くやうに話して聞かせた。こんな事はお手の物てある。

その翌日ワルインツオーフが姉と連立つて食事に招れて來た。ダーリヤはワルインツオーフが來ると常ても愛想善くしてゐたが、此日は殊にチヤホヤ歎待した。ナターリヤは何とも云はれず辛かつたが、併しワルインツオーフが極く謹ましげにしてゐて、遠慮勝に話をして呉れたから、心の中では内々嬉しく思つてゐた。

靜で隨分淋しかつた其日も暮れて、卒お開となる時、皆心の中で、舊の轍に陷つて來たなと思つたが、この舊の轍に陷るといふとは大に意味のあることで、ツヒ尋常の事ではないのである。

成程誰も皆舊の轍に陷つて來たが……ナターリヤばかりは然うは行かぬ。一人になつてから辛ふじて臥臺まで來て、ガツカリして歎も嘘も無くなつて、卒然枕に面を埋めて了つた。眼に生て

ゐるのが辛くて悲しくて厭で〳〵ならぬ。我ながら我身に愛想が盡きる。慕つても歎いても皆身の恥になるのであれば、寧そ死んだが勝かとさへ思つた……倘ほ其後も久くの間は晝も辛く、夜も眼が合はず、悶苦ひてゐたが、何してもうら若い身の、これからが花といふ所であるから、早かれ晩かれ創痍も癒える道理。人といふものは如何な憂い目を見ても、其日の中に高々〳〵翌日になれば――少し艶の無い言方だが――最う飯を食ふ。それ是が氣の安まる發端といふものである。

ナターリヤは酷く苦ひだ、此樣な思をするのは生れて始てで……けれども初ての苦みは初ての戀のやうに、善くしたもので、二度とはせぬものである。

（十二）

二年許經つた。五月初旬の事であつたが、觀樓へ出て、アレクサンドラ、パーウロウナ、其頃は最うリービナではなくて、レヂチフが坐つてゐた。レヂネフの所へ嫁てから最う一年餘にもなるのである。相變らず美しいが、此頃は少し肥つたやうで。觀樓には階が附いてゐて、それを降りると庭になつてゐる。乳母が小さな白い外套を被て、白い房の附いた帽子を戴つた、頰の紅い赤兒を抱いて、觀樓の前を彼方此方と歩いてゐたが、アレクサンドラはともすれば、其兒の方を見遣つてゐた。赤兒は泣きもせずに、眞面目くさつて自分の指を吸ひながら、ぢつとりと四邊を廻視してゐた。どうしてもレヂネフの息子に違ひない。

アレクサンドラの側には、例のビガーソフが坐つてゐた。此前から見ると、眼立つ程白髪も殖えて、背が曲つて、痩れてゐたが、前齒が一本脱けて了つたので物を云ふと聲が漏れる、それだけに又言語が餘計毒々しく聞える。齡を取つても肝癪は直らない、其代り鋭い處も鈍つて來て、前よりは餘計一つ話を反覆してするやうになつた。レヂネフは留守であるが、茶の入る迄には歸らうと、皆心待に待つてゐるのである。最う日沒て、日の入つた方には薄く黄ろく檸檬色をした線が棚引いて、其反對の方角には、上の方に紅い連翹色の線と下の方に碧色の線と二線見える。浮雲は中空に消えて了つた。どうやら天氣が續きさうな空模樣である。

突然にビガーンフが笑出したので、アレクサンドラが、

「何が可笑しのです？」

「なに、何でもないが……昨日、聞いてゐると、さる小作が女房に――甚く饒舌り立つてゐたもんだから――そんなに顯を叩くないと云つた。なんと面白いぢやがアせんか？　顯を叩くない！　本當に然うで、女の饒舌るのは顯を叩くだけの事でさ、尤も貴女方の事を謂ふのではないが……それにつけても昔の人は旨い言を云つたものさ。ソレ美人が顯の所に星の飾を附けて窓際に坐つてゐたが、口は少しも開かなかつたといふ話が有るでせう。眞に彼話の通りでさ。其證據には、一昨日族長の妻君が私に向つて、貴君の傾向が氣に喰はんと云つて、ポンとピストルを撃放した。

傾向が可笑ぢやがアせんか？　何と、彼樣な女はふッと如何いふか、鹽梅て舌が働らかなくなつたら、人助にもなるが自分も助かるといふもんぢやがアせんか？」

「貴君は相變らずですね、矢張女の事を酷く仰しやるのね。それも因果といふものでせうが、お氣の毒のやうですね。」

「因果？　飛だ事を仰しやる！　私の考ぢや、世の中に因果な事は三通しかない、冬寒い座敷を借りてゐるのと、夏窮屈な長靴を穿いてゐるのと、波斯粉でも振掛けたい程赤兒の啼く室に泊つてゐるのと、これだけだ。それも然うだ。が私は此頃は至つて穩當なつた模範にしても可い位だ！　行儀を善くしてゐますからな。」

「然うで御坐いませう。だから、加之昨日ユレーナ、アントノウト

が貴君は酷いつて泣言なんぞ云ひはしませんからね。」

「へ、へえ、エレーナが！　如何な事を云つてゐました？」

「此間の朝何を伺つても貴君は《何が？　何が？》とばかり仰しやつて、それも大層慳貪に仰しやつて、些とも相手になさらなかつたといふぢやありませんか？」

ビガーソフは笑出した。

「如何です、好い思付でがせう？」

「飛だ思付です！　まア一體、ビガーソフさん、女は然う苛めて濟むもんでせうか？」

「女？　女でせうかエレーナは？」

「女でなくて何です？」

「大鼓て、尋常の大皷てす、棒て叩くな……」

「ア、さう〳〵。　貴君はお目出度い事が有りましたね。」

といふが話を變へたいからて。

「何です？」

「裁判が濟むて……グリノーフの原が貴君の物になつたさうてすね？……」

「左様私の物になりました、」と苦い面をする。

「自分の物にしたいと云つて彼程永い間御心配なすつたんぢやありませんか？　それだのに今になつて其様な不足らしい面をなすつて……」

ビガーソフは故意と落着いて、

「だが、旬外れに逢着つた幸福ほど忌々しい業腹なものは有りませんからな。幸福は幸福でも、矢張嬉しくない、それでゐて最う悪體を吐くことも、運命を罵ることも出來なくなるのだ――大切な權利を褫奪されるのだ。いや、旬外れの幸福といふ奴は厭な小癪に觸る奴でがす。」

アレクサンドラは唯首を窘めたばかりで、何とも云はなかつた。頓て、

「乳母やー　最う坊を眠かす時分だらう。此處へお與し。」

で、アレクサンドラは赤兒を眠かしに掛たから、ビガーソフは何か口の中でブツ〳〵いひながら、向ふの隅の方へ去つて了つた。

すると、ツヒ窗の向ふの往來を、レジネフが例の馬車に乗つて通る姿が見える。馬の前には大きな番犬が黄色のと鼠色のと二匹駈げて行く。これは近頃飼うたのであるが、能く咬合ふ癖に仲が善くて、始終一所に歩いてゐる。牧場で使ふ老犬が門を出て、此二匹の犬に立對つて、口を開いたから、吠えるのかと思へば欠びをして、嬉しさうに尾を掉つて後へ戻つて來る。

レヂネフは外から妻に聲を掛けた。

「サーシャ（アレクサンドラの和げて呼べるなり）一寸御覽。珍らしい人を連れて來たから。」

「然う云へば、夫の背後に合乘をしてゐた者があるが。誰だかアレクサンドラには一寸とは判りかねた。

「あら、まア、パシストフさんだよ！」

と頓て大きな聲を出すと、レヂネフが、

「如何だ、珍らしいだろう。それに目出度い話がある。さア其處へ往つて話さう。」

と邸内へ乘入れる。

間もなくバシストフと一所に觀樓へ出て來た。

唐突に萬歳と云つて妻を抱えて、「セレジヤワルインツーフの名セルゲイを和げて云へるなりは結婚したとさ。」

「さア、誰と？」

とアレクサンドラは胸を躍らせる。

「ナターリヤとさ……バシストフさんがマスクワから來たので判つたんだが、お前の所へ手紙が來たさうだ……如何だ、坊主

（と子供の兩手を執つて）お前の叔母さんが出來たぞ！……何といふ冷淡な奴だらう！　眼をパチクリさせるばかりだ！」

「お眠いので、」と乳母が云ふ。

バシストフはアレクサンドラの側へ來て、

「只今お聞きの通りて。ダーリヤさんの依頼て、村の總勘定に今日マスクワから參つたのてすが、貴女の所へお手紙が……」

アレクサンドラが手早く弟の手紙を開封して見ると、ほんの三行半て、ナターリヤに結婚を申込んて、當人は勿論、ダーリヤの承諾をも得たが、いづれ委細は次便に申上る、人々へ宜しく、といふだけの事てあるが、嬉しさは文面に溢れて見える。大方夢中て書いたものてあらう。

茶が出る。バシストフに坐を勧る。皆先を爭つて思ひ〳〵に問ひかける。バシストフの土產の報道て人々喜んだ。ビガーソフさへ喜んだ程である。

頓てレヂチフが、

「貴君に伺つたら判るだらうが、ナターリヤは、何やらカルチャーギンとかいふ男と妙な事が有つたと云つて、此邊でも評判しましたが、そんなら痕迹もない事でしたか？」

（カルチャーギンといふのは未だ壯い好男子て、交際社會では女殺しと謂はれてゐたが、酷く高慢て、澄し切つてゐて、おつそろしく容躰振るのて、生きた人てはなくて、廣く世間の有志家の醵金て建てた銅像か何かのやうな男てある。）

バシストフは、莞爾して、

「いや、滿更痕迹の無い事てもないてす。ダーリヤさんには大層氣に入つてゐたやうてすが、何分にもナタリーヤさんが嫌つてゐて、噂をされても慄然とするといふやうな鹽梅だつたので……」

「彼男なら私も知つてゐます、」とビガーソフが引取つて、「いやお話にならん愚物だ、甚い愚物だ……それは甚いてがす！　若し人間が皆彼奴のやうだつたら、萬と錢ても取らなければ、生てゐるのはお辭りてすな、どうも……」

「かも知れませんな、」とバシストフが受けて、「けれども、交際社會ては仲々利け者て。」

「そんなことは如何ても可いけれど、まア、どうも嬉しいこと！：

……ナターリヤさんも喜んでゐませうね、浮々して？……」

「然うですな。御存じの通りの方だから、矢張平生のやうに落着いたもんですが、併し如何も御満足のやうで。」

談話が榮えて、人々心持好く時を移した。その内に晩餐になる。

バシストフにラフィータを注いで遣りながら、レヂェフが、

「それはさうと、ルーヂンは如何したでせう？」

「確としたことは知りませんが。が、兎に角去年の冬一寸マスクワへ來て、それから同伴が有つてシンビールスクへ往きました。私も暫く手紙の往復をしてゐましたが、最後に何處へとも云はずに、唯シンビールスクを發つと云つて寄したぎりで、それからといふものは更に行方が判りません。

「大丈夫失くなりはしません、」とビガーソフが引取つて、「屹度何處かに蹲踞つて、説教をしてゐるです。あゝいふ人にはいつても二人や三人は崇拜者があるもので、口をアングリ開いて説教に聽惚れて、錢を借して呉れるものです。まア、見てゐて御覽なさい、ルーヂンは屹度何處かッアレウオコクシャイスクかチウフローム かで、鬘を戴つた極の老婆が何かを瞞着して、一代の人傑だ何ぞと思はれて、其手で介抱せられて死ぬに定つてゐるから。」

「どうも酷く仰しやる、」とバシストフは小聲に云つて、不機嫌な面をする。

「いや、些とも酷いことはないと、」ビガーソフは反對する。「私はルーヂンは唯人の所を喰倒して行くばかりの男だと思つてゐる。

（と云放つて、レヂチフの方を振向いて、未だお話することを忘れてゐたが、私はルーヂンと一所に外國へ往つたアノ、テルラーホフといふ男と相識になりましたよ。實際です！　ルーヂンの事はテルラーノフから聞くと、それは頗る滑稽だ。殊に不思議なのは彼男と朋友とか崇拜者とかいふ人は時が絶つと皆敵になつて了ふ。」

「私だけは例外に願ひたい、」とバシストフは憤然となる。

「貴君は別物さ。それは云ふ迄もない事だ。」

「テルラーノフから如何な事をお聽きなすつたの？」とアレクサンドラが問く。

「種々な事を聽きましたな、數が多いから一々記えてゐないけれども、併し其中て一番面白いのは、ルーヂンは始終發達する男だから……彼輩は無暗に發達します。他の者なら唯眠たり食つたりしてゐるのだけれども彼輩のは夢の發達中、飯の發達中なんて。

ねえ、さうぢやがアせんか、バシストフさん？（と云つたがバシストフは相手にならなかつた。）て、發達する男だから、哲理研究の結果として、どうしても女に惚れなければならん、といふ結論を得た。なんと不思議な結論ぢやがアせんか？　そこて、その不思議な結論に適當して、婦人を探索し出したところが、幸にして去る佛蘭西女に逢着した。頗る美人て、ポンネット屋か何かなんて。それがさ、ライン近くの去る市での事なんださうて。て、その女の所へセッセと通ひ出した。種々な書物を持つて行つて、天氣の話や、ヘーゲルの話て持切つてゐたもんだから、女も妙に思つた。大方天文

學者だらうと思つてゐた。けれども、御存じの通り、ルーヂンもなに踏める男だ、それに外國の者で、露西亞人と來てゐるから、婦人もソレ滿更でもなく思つた。て、到頭逢引に引張出したが、そのまた逢引といふ奴が極く風流で、舟で逢ふことにした。女も承知して、二人で舟で遊びに出て、二時間も漕廻つてゐたが、其間ルーヂンは何をしてゐたかと云へば、女の頭を撫でまはして、物思はし氣に空を瞻上げて、私はお前を娘のやうに思つてゐると、何邊か繰返し繰返し云つた。だから女も憤々怒つて、家へ歸つて了つたが、跡で悉皆其事をテルラーホフに話したといふことです。ルーヂンはさういふ男なんだ！」

と話し終つてピガーソフは高く笑つた。

「またお株の皮肉！」とアレクサンドラは口惜しさうに云つて、彼人の事をいくら惡く云はうと思つても、其樣な事しか云へないんだから、如何しても傑に達ひない。」

「其樣な事しか云へない！　これは可笑い！　そんなら何てがすか、彼男が人の所を喰倒して行つたり、借倒して……御主人！　貴君も矢張借倒された方ぢやがアせんか？

「ピガーソフさん！」とレヂチフが口を開いて、如何にも眞面目な面色になつた。「ピガーソフさん！　貴君も御存じだし、また家内も知つてゐる事だが、私は初は兎に角後には餘りルーヂンを好かなくなつたのみならず、折節は非難したことさへある。けれども（どシャンパンを其處らのコップに注ぎ廻して）、一つ御相談がある

今義弟と義妹との健康を祝して下すつたから、此度はドミートリイ、ルーヂンの健康を祝して、一つ祝盃を擧げやうぢやありませんか？」

アレクサンドラとビガーソフとは吃驚してレヂチフの面を見守る。バシストフは嬉しいので面を眞紅にして、慄上つて、眼をむき出す。

レヂチフは言葉を繼いで、「私は彼男を善く知つてゐる。缺點も善く判つてゐる。凡人でない代り、缺點が殊に目立つて見える。」

「豪傑ですからな、」とバシストフが應援に出懸ける。

「豪傑の分子も幾分かあらう。けれども、意思が……これが一番の缺點だが、意思が如何も弱い。が、それは先あ可いとして、彼男

には仲々好い處がある。勝れた處がある。狂熱があるが、狂熱といふものは今の世の中では一番大切なもので。私のやうな無頓着な者がかういふのだから、餘程大切に違ひないです。我々露西亞人は餘り理窟ぽくなつた、冷淡に無氣力になつて眠つてゐる、驚んでゐる。誰でも關はない、一轉瞬の間でも我々を動かし、我々の冷却した情を溫める者があつたら、それは恩人といふ者です、最う好い加減に眼を覺さなけりやならんです。ねえ、サーシャ、お前とルーヂンの噂をして、冷淡だと云つて私が彼男を非難したとが有つたつけな。冷淡と云つたのは間違つてゐると云つても可し、また間違つてゐないと云つても可い。彼男の冷いのは血が冷いので、頭が冷いのぢやない——だから冷いと云つて責るのは酷だ。

それから彼時は手練師だと云つたけれども、手練師でも虚言家でもない、人を欺さはしない。始終餘所を泊り行いてゐるけれども、卑しい心が有つてゞはないので、極く無邪氣で行いてゐるのだ。それは成程、何處かで倒死をするかも知れんが、倒死をしたからと云つて、罵倒すべきものでせうか？　意思の力が弱いから自分は何も仕事を仕ないけれども、それだからと云つて社會を裨益しないとは云へぬ、既に裨益してゐないとも云へぬ。少年の内にはルーヂンのやうに天賦に欠けた所があつて、働く力、意思を實行する能力の無い者ばかりでもないから、さういふ人達がルーヂンの說を聽いたら、必ず大に得る所があるに違ひない。これはまづ第一私が自身に經驗した所です。家内も知つてゐるが、私は若い頃は

大にルーヂンの感化を受けてゐた。尤も私も曾てルーヂンの說は人を動かすに足らぬと云つたこともあるけれど、それは私と同じ年配になつて、私のやうに老込んで了つた人の事をいふので。最う斯う年を取つては、話の中に一寸虚僞らしいことが雜ると、折角の雄辯も其甲斐が無くなつて了ふけれども、少年といふものは幸にして未だ然う耳が肥えて贅澤になつて居ない。だから、話すことさへ立派な事であれば、調子などは如何でも可い。調子は自分の胸に蓄へてある。」

「謹聽！　謹聽」とパシストフは大聲に叫いて、「實に仰しやる通りです。實にルーヂンの感化と云つたら、それは實に人を動かす、人を逐立る、凝立としてはをらせない、腹のドン底まで引搔廻す、腸を搔

捲る！」

レヂネフはビガーソフを顧みて、「此通だ！　これでも未だ證據が要ますか？　貴君は哲學が嫌ひで、哲學の事といふと、いくら惡く云つても、云足りないやうに見えるけれど、私も餘り哲學は贔負でないし、それに善くは解りもしないが、併し哲理に趨るのが今の時弊ぢやない。哲學上の變に紛糾した議論や、譫言のやうな言草は露西亞人の腹には入らないといふものは、コンモン、センスが一杯詰つてゐるから、其樣なものゝ入つて來る餘地がないのである。けれども、哲學を攻擊するを名として、眞理に一致せんとする、悟を開かうとする、總ての傾向を手當り次第に攻擊してはならんルーヂンの不幸なは露西亞を知らんからで、露西亞を知らんのは實に

大なる不幸です。露西亞は我々の一人を欠いても立つて行くけれど、我々は總て露西亞といふものが無くては生きてゐられん。露西亞が無くても濟むやうに思つてゐる人は哀むべく、實際露西亞が無くても濟むで行く人は更に哀むべしである。博愛主義は無意義で、博愛主義を奉ずる者は零である、いや、コンマ以下である。國家以外には美術もなく、眞理もなく、生活もなく、何もない。人の面にしたところで、如何理想的のものでも、人相がなければ成立たぬ。人相が無くても濟む面は變なものに違ひない。けれども、これも亦ルーヂンの罪ではなく、寧ろ彼男の運命、辛い悲しい運命であつて見れば、これを以て彼を責むるに忍びん、何故ルーヂンのやうな者が出來たかといふことを研究するも面白いが、餘り問題外

に渉るから、それは廢めにして、唯ルーヂンにも好い所があるのと認めて、其利を享ける恩を謝するだけの事にして置きませう。我我はルーヂンに對して偏頗な考を持つてゐたが、偏頗な考を持つてゐるよりか、感謝してゐる方が餘程氣樂ですからな。ルーヂンを罰するのは吾々の職分でもなければ、また餘計な事ですといふものは當人が自分で自分を罰し過ぎてゐる位の所ですもの……

……どうぞルーヂンも不幸を經て、垢が去れて、生粹の男子にならせたい。兎に角ルーヂンは私の青年の時の朋友ですが、我々も青年の頃には希望も有つたし、意氣込も壯であつたし、正眞でもあつたし、好意も多かつた。二十歳ごろに我々の心を領したものは人生の實で、それに勝るものは今までも無かつたし、また是からも恐

らくあるまいと思ふと、成年の頃が頻に戀しくなる。からして今青年を祝し、ルーヂンの健康を祝して、一つ飲みます。

人々レヂネフと杯を合した。バシストフは夢中になつて殆ど杯を壞さうとして、一息に飲干す。アレクサンドラはぢッと夫の手を握締めた。

「御主人、私は貴君は雄辯だとは思つてゐたが。實に閉口しました。それではルーヂンの好敵手だ。」

とビガーソフが云ふと、レヂネフは少し癪に障つた氣味で、

「戯言を言つちや不可、些とも雄辯なことはない、また貴君だつて餘り閉口する風でもないぢや有りませんか。けれども、ルーヂンの噂は最う好い加減にして、何ぞ外の話にしませう。えゝと……

何とか云つたつけな……さう〳〵パンダレーフスキイは如何してゐます、矢張ダーリヤさんの家に居ますか？」とパシストフの方を向く。

「居ますとも！　ダーリヤさんの周旋で今は奉職してゐますが、仲々〳〵儲かるさうで。」

レヂネフは冷笑して、

「彼男は倒死をする憂はない。大丈夫なものだ。」

食事が濟む。客は歸る。夫婦差向ひになつた時、アレクサンドラは莞爾々々して夫の面を覗込んで、

「今日は貴郎は上出來だつたこと！　本當に立派な演說だつたわ。だけれど、少しルーヂンの肩を持過ぎましたね、先達てはその

反對て非難し過ぎたけれど……」

「倒れたる者は打たずさ。彼時はお前がルーヂンに迷ひはせんかと思つたもんだから、それてさ。」

「そんなことは有りませんよ、」とアレクサンドラは何處までも無邪氣なもので、「彼人はおそろしく學問が有りさうだもんだから、何だか氣が置けて、彼人の前へ出ると、何と云つて好いものか判らなくなる程てしたもの。だけれど、ビガーソフさんも隨分酷い言を言ひますねえ。」

「ビガーソフ？　ビガーソフが居たから、私も熱心にルーヂンの辯護をしたのだ。ルーヂンのことを方々喰倒して行くなんぞといやアがる！……私の眼から見ると、ビガーソフの方が適に卑

劣だ。可なり財産も有つて、何を見ても冷笑してゐる癖に、身分のある者とか、金満家とかいふと、こびり附いて了つて離れない。お前は知るまいが、ピガーソフは何を見ても彼樣に毒々しく惡體を云つて、哲學や婦人を攻撃するけれど、あれで、役人をしてゐる時分には、隨分賄賂を取つたものだ、それがまた酷い取方さ！　あゝいふ奴に限つて其酷な事をするもんだ！」

「まア、どうも！　見掛けに依らんもんですねえ。」暫くしてから、

「あなた！　如何でせうねえ……」

「何が？」

「ワルインツオーフはナターリヤと一所になつて旨く行くでせうか？」

「さうさなア……まア旨く行くだらうよ。それはナターリヤが采配を揮るね――これぎりの話だが――彼娘はワルインツオーフよりか利口だもの。けれども、ワルインツオーフも好い漢だし、それに心からナターリヤに惚れてゐるんだから、何も云ふことは無いさ。例へば君前と私にしても、互に思合つてゐて、幸福な身の上といふものだらうね、さうぢやないか？」

アレクサンドラは莞爾して夫の手を握締めた。

＊　＊　＊　＊

アレクサンドラの家で前の話があつた恰ど其日に、露西亞の片田舎で、鉦の蓋を附けた見すぼらしいキビットカに瘦馬を三匹服けたのが、日盛をも厭はず、がたくり廣い街道を駈て行くのが見え

た。ぼろ〳〵した駱駝毛織の上衣を着た白髪頭の百姓が足を斜に踏張りながら横木の上に乗つて、やたらに縄の手綱を引張つて鞭を揮舞してゐたが、キビットカの内には眉庇附の帽子を冠つて故い埃だらけの袖無上衣を着た背の高い男が、小さな鞍の上に腰を掛けてゐた。これは誰でもない、ルーヂンである。帽子を眉深に冠つて頸垂れてゐたが、キビットカが躍るので、彼方へ傾ぎ此方へ傾ぎしてゐる。全く感覚を失つてゐるやうな、眠つてゐるやうな、妙な風をしてゐたが、頓て居直つて、

「立場にはまア何時着くんだ？」

と百姓に云ふと、

「そんねえに云はつしやるけえど、上りだア、お前さまア」と一段

力を込めて手綱を引つて、「まんだ二里もありますべえ……コレ、コン畜生奴が！　おどれ、業つく張めが！……」と細い聲で叫きながら、右の方の副馬を打はじめた。

「お前は馬を御ふことが餘り上手でないと見えるな。朝から出かけて未だ着かないぢやないか。些と歌でも唱つたら如何だ。」

「だつて仕方がねえだ！　馬めい、腹ア減て草臥とるだ……それにえら熱いもんだけん……歌あ唱へつて、私は御者ぢや無えだ、唱へねえと思ひなさろ……えい、この道陸神め！　去かんけえ、」と通りすがりの鳶色の着物を着て、切れかゝつた草鞋を穿いた男に云ふと、其男は立止つて後を振向いて、

「何言すい、御者奴が！」

と云つたが、頓てさも〳〵口惜しさうに、

「がり〳〵亡者め！」

と悪躰の繼足をして、頭髪を一振ふつて向ふの方へ行て了つた。

「どつこい！」と百姓は斷つたやうに云つて、中の馬を引張つて、

「その手は喰ふめい、その手は……」

其内に馬も疲足を引摺つて、どうにか斯うにか立場まで漕附けたので、ルーヂンはキビットカを降りて、貨錢を渡して、自分で鞄を立場へ持込むだ。百姓は貨錢を貰つても、辭儀もせずに、久らく掌で錢を引覆して眺めてゐた――大方酒手が不足てあつたのてあらう。

「作者の一知己に若い頃多く露西亞を旅をして行いたものがあ

る。其人の云ふのに、若し立場にカフカーズ捕虜譚の一節か、又は露國の陸軍將官を描いた額が掛つてゐれば、直き馬が雇はれるけれど、若し額が有名の骨牌師ジョルジ、デ、ジエルマニーの畫であつたら、到底も急には立たれぬから、ジョルジが若い頃縮れた頭髪を鶏冠のやうに立てゝ、白い胴衣を着て、極狹い短い袴を穿いた姿や、之れから年を取つてから屋根の勾配の急な百姓家の内で、椅子を高く振擧げて、現在自分の息子を撃殺さうとしてゐる怖ろしい面色をつく〳〵見倦かなければならぬものと覺悟をしろと、云つたことがあるが、今ルーヂンの入つた立場には即ち此骨牌師の一生が掛つてゐた。人を呼ひて見ると、番人が睡蚕眼をして出て來た、尤も番人に睡蚕眼をしてゐないのも滅多には無いが。而して、ま

た何とも云ひもせぬ内に、ぼやけたやうな聲で、馬はないと云ふから、ルーヂンが、

「馬は無い？　未だ何處へ行く者だとも判らぬ内から馬はないとは、をかしいぢやないか？　私は今尋常の馬で來たのだ。」

「どうも馬が無いてがんすもの。お前さま、何處へ往かつしやるだ？」

「私は某處へ往くのだ。」

「馬は無えだよ、」と云捨てゝ、番人は出て行つて了つた。

ルーヂンは舌打をして、窓際へ寄つて、帽子を卓の上へ放り出した。見ると、左程變つても居ないが、唯此二年の間に少し色黑になつて、白髪も處々に見えるそれに眼が今も尙ほ美しいけれど、何だか朦朧してゐて、苦しい切ない思をしたのが小皺になつて、口元や頬や蜂谷の邊に現れてゐる。

衣服も甚く着破したもので、白襯衣などは着てゐないらしい。今は盛も過ぎて、園丁の言草ではないが、此人も最う種子になつたものと見える。

旅人が所在がないと往々することであるが、ルーヂンが壁の掲示を讀むでゐると、ふと戸が開いて番人が入つて來た、

「某處へ行く馬は有りましねえ、待つて御座らしたつて駄目だんべいが、某處なら戻馬が有るだ。」

「某處へ戻馬が？　戯言いつちや不可！　私は其樣な方へ行くのぢやない。ベンザへ行くのだ。某處ならタンボーフへ行く道

だらう？」

「それだつて好かつべえぢやねえか？　タンボーフを廻つて行くだ。さうてもねえけりや、某處からも行かれるかも知んねえだ。」

ルーヂンは考へてゐたが、頓て、

「チョッ、仕方がない。馬を服けて貰はう。如何でも可い、タンボーフへ行かう。」

程なく、馬車の用意が出來る。そこでルーヂンは鞄を持出して、馬車に乘つて坐つたが、まだ以前のやうに首を垂れた。その背を聞くして蹲踞つてゐる所を見ると、何處か悄然と萎れた所が有る……て、馬車は鈴の音を刻むやうに立てゝ氣の無さゝうに駈けて行つた。

尙ほ幾年か經つた。

《大團圓》

或秋の寒い日の事であつたが、某縣の某町で一等と謂はれる旅店の玄關先に旅馬車が着て、伸をしながら嘘をして馬車を出た紳士を見ると、未だ老人といふてはないが、最うデップリ體格も出來て、人にも推重られる年配である。梯子段を登つて二階へ上つて、廣い廊下の入口に足を停めたが、誰も居ないので、大きな聲で座舗へ案内を求めた。すると何處かで戸の開く音がして、低い衝立の後から背の高い僕が飛んで出て、少し體を斜にして前に立つて案内をしたが薄暗い廊下ながら僕の背後の妙に光るのと袖を捲揚

げてゐるのとは隱現見えた。旅の紳士は座舖へ入ると其儘外套を脱ぎ襟卷を外して、長椅子へ腰を掛け、握拳を兩膝に置いて、睡惚けたやうな面をして四方を視廻したが、頓て從僕を連れて來いと命じたので、僕は愛想善く會釋をして出て行つた。旅の紳士といふは誰でもない、レジネフで。徵兵の事で田舍から出て來たのである。

レジネフの從僕といふのは頭髪の縮れた頬の赧い若い男で、鼠色の外套に青い帶を締めて、柔いフエルト氈の靴を穿いてゐたが、座舖へ入つて來た。

それと見てレジネフが、

「どうだ？　貴樣は輪鐵が外れると云つたけれども、何事もなく

着いたらう。」

「何事も御座りましなんだ、」と僕は外套の立襟の中で無理に微笑して、「何故外れなかつたつぺえ……」

「誰も居らんか？」と廊下で呼ぶ者がある。

レジネフは駭然して耳を欹てた。

「おい！　誰ぞ一寸！」

レジネフは起上つて、入口へ來て、急に戸を開けると、最う大方白髪頭の、背骨の曲つた、背の高い男が、青銅の紐釦を附けたプリースの上衣を着て、眼の前に立つてゐる。一目視ると、それと知れたから、レジネフは胸を躍らしながら思はず聲を揚げて、

「ルーヂンさん！」

ルーヂンは振向いて視たが、レジチフが燈火を背後にして立つてゐたから、ツヒ一寸は判らぬやうで、不思議さうに面を眺めてゐる。

「お見忘れなつたか？」

といふと、ルーヂンも

「や、レジチフさんでしたか！」

と云つて、手を出しかけたが、狼狽して、また引込めやうとする：

…… その手をレジチフは兩手で握つて、

「お入なさいな、マア好いてせう！」

と座舗へ伴込む。

レジチフは一寸は口を開き得なかつたが、頓て、我にもなく聲を

低めて、

「貴君も變りましたな！」

「然うださうですな、」とルーヂンは座敷の内をきよろ〳〵視廻して、「全く年齢の加減で……貴君は些とも變らない。アレク……細君はお變も有りませんか？」

「ほア、達者でゐます。が、併し如何して此處へ？」

「種々な事が有つて……實は來る氣で無かつたのですが、知つてゐる者が居るので……併し、好い工合でした……」

「何處で食事をやります？」

「されば さ。何處か外へ出てやりませう。實は今日中に立たなきやならんので。」

「今日中に？」

ルーヂンは仔細あり氣に微笑して、

「今日中に。種々都合が有つて、これから田舍へ歸つて永住しやうといふので。」

「どうですか、一所に飯を喫はうぢや有りませんか？」

ルーヂンは此時始て直とレジチフの面を目守めて、

「一所にですか？」

「さうです、昔に返つて、朋友交際て不可か？　貴君にお目に懸らうとは思掛けなかつた。今日別れゝば、また何時逢れるか判らん。此儘、別れるのも餘り呆氣ないぢや有りませんか？」

「ぢや、御一所に喫ませう。」

レジチフはルージンの手を握つて、僕を召んで、食事の支度をして、それからシャンパンを一本氷に漬けて置けと命じた。

*　*　*　*　*　*

食事中レジチフもルーヂンも、云合した樣に書生時代の話ばかりして、生殘つてゐる者や死だ者の噂、または昔の事などを憶出して語合つてゐた。初の程はルーヂンも話をしても氣が乘らぬやうであつたが、杯を累ねたので、漸く元氣づいて來た。食事が終むて僕が最後の皿を持つて出て行くと、レジチフは起上つて、戸を締切つて、卓へ戻つて來て、靜に顋を兩手で支へて、

「此前分れてから貴君は如何してゐました？　これから一つ其話を聽きませう。」

ルーヂンはヂロリとレジチフの面を視た。

「あゝ、變つたなア、氣の毒な！」とレジチフも心の内でまた思つた。

最う老年にも近いことゆゑ、顔にも自ら其影が射してゐるけれど、ルーヂンは左程變つてゐるでもない、殊に立塲で見た時から視ると、左程でもない。けれども、面色は違つてゐる。眼付も違つてゐるが、起居振舞も愚頭々々してゐるかと思ふと、急に又烈しくなる、言語も氣の拔けたやうで、張合が無くて、一體樣子が如何にもがつかりしてゐる。大方心の底では獨りで鬱々してゐるのであらう。概して青年の頃は溢れる程の希望を懷いて、自惚も强く、何も彼も意の儘に成るやうに思つてゐる癖に、故と鬱いだやうな面色をするものて、ルーヂンも昔は其樣な風も有つたけれど、今はそれ

とは全く違つてゐる。

で、ルーヂンが、「分れてからてすか？　いや、なか〳〵口では云ひ切れん程の思をして來ましたが、併し詳くお話しする程の價値は有りません。隨分彷徨きました、躰ばかり彷徨いてゐたのてはなくて、心も彷徨いてゐました。種々な事を遣つても見たし、又種種な人に交際つても見たが、いつも終局には失望しました。失望ばかりしてゐたてす、（と繰返して云つた、レジチフが異しく氣を入れて自分の顔を覗込んてゐるのを見て。）いつも終局には自分の說を、自分の口からなら勿論だが、人の口から聽いても厭になる。子供のやうに怒つぽくなつて、それから馬のやうに鈍く無感覺になる、鞭で打つても尾も搖かさなくなる。喜び勇むて、いろ〳〵の

希望を懷いた跡が、いつも互に敵視して苦々しい思をするけれど、其樣な事をしたつて挽回は附きやしませんや。鷹のやうに飛て出た奴が、殼を潰された蝸牛のやうに這つて戻つて來るのだが、時時路が濘つてゐてねえ(と云足をして一寸顏を顰めて見せた。)貴君も御存じの通り……といひかけるのをレジチフは遮つて、

「一寸、吾々も昔は互に君僕で話をしたものだ。如何です、昔に復らうぢや有りませんか? 而して祝に一つ飲りませう。」

ルーヂンは慄へながら起上つた。眼中は妙に爛々とした。

「飲りませう。難有い、飲りませう。」といふ。

二人とも一杯づゝ傾けた。

ルーヂンは又口を開いて、莞爾しながら、

「君も」と、君といふに力を込めて、「知つてる通り、僕の腹の中には何か虫のやうなものが居つて、其奴が責るので、どうも凝然としてゐられない。から堪らなくなつて人に撞着ると、初は大抵僕の感化を受けるけれど、後がいけない……(と手眞似をして)貴君に……君に別れてから、僕は種々な事に出遇つて、種々な經驗を得た。行つて見ては廢め、行つて見ては廢めして、二十邊も新規蒔直をやつたが――詰り御覽の通りの體になつて了つた!」

「といふが支へるものが無つたから、」とレジチフが獨言のやうに云ふと、

「さうです、支へるものがなかつたからです!……一體僕にはなか〳〵物を纏めるといふことが出來ない、尤も足を踏張る所が

ないので、土臺から作つて懸らなければならんのだから、それも其等さね。僕の爲て來た事、といふが詰り失敗ばかりだが、その話は詳くは仕ますまい。唯一ッ二ッ仕ませう……運が向いて來たやうに思はれた、いや然うでない、旨く行きさうに思はれた――少し差がある――さういふ塲合を一ッ二ッ……」

と云つて頭髪を後へ拂つた、その手振は昔に變らなかつたが、黑く濃かつた頭髪が今は白髪で薄くなつてゐる。

て、「まア、聽き給へ。僕は、マスクワでね、隨分奇妙な人間に出逢つたです。なか〳〵金滿家で、地所も澤山に持つてゐたが、別段官途に就いてゐた人ではなかつた。此男に一ッの癖がある――といふのは何學に限らず、總て學問が非常に好きであつた。如何し

て其樣な癖が附いたものか、今だに解らないが、兎に角此男にして此癖の有るのは牛に鞍を置いたやうなものだ。此男は普通學問をした者と肩を竝べて行くのも頗る困難の方で、唯物を云ひさうな眼付で視廻したり、仔細らしく頷くばかりが能で、口一ッ碌に開けない。僕は此男程天分の薄い無能な者を見たことはないですあのスモレスカヤ縣に砂ばかりで、他には何もない、罕に生ゑてゐる草も牛さへ喰はない、といふ所があるさうだが、此男は恰でそれだ。手に乘るといふ事は一つも無くて、何事も皆手に餘る、頗返しが附かない、人には容易い事でも此男に遣らせると難しくして了ふ、それでゐてそれが遣りたくて〳〵堪らないのだ。若し此男の儘になつたら、人間は皆踵で物を喰はうとするやうになるかも知

れん。讀だり、書いたり、勉強ばかりしてゐるが、倦きない。非常な忍耐で宛で。意地になつて勉強してゐるやうだ、尤もなか〳〵負嫌で強情な男ですがな。獨身で、奇人と云ふ評判を取つてゐた。僕は此男と相識になつたのです――而して、まア、好かれたのですな。先の如何いふ人物といふことは直ぐ解つたが、何分熱心なのには感心した。それに非常に金を持つてゐるから、此男を利用すれば、隨分仕事が出來る、社會を益することが出來る……と思つたから、それで僕も其男の家へ同居して、到頭其持村へ一所に出懸けた。其時は非常な大計畫を立てゝ、種々な改革やら、新らしい事……」

「ダーリヤの家に居た時のやうに、」と云つてレジチフが毒の無い微笑を漏す。

「どうして〳〵！　彼時は僕が何を云つたつて駄目だとは内々思つてゐた位だが、其時は然うでない、全く場合が違ふ。そこで、農書を澤山擔いて行つて……尤も卷尾まで讀んだのは一冊もなかつたが……而して仕事に懸つて、最初は難かしからうと思つてゐたが果して旨く行かなかつた。けれども、其内に如何か旨く行きさうになつて來る。友人といふのは默つて視てゐて邪魔を仕ない、といふが、まア比較的の話で、僕の意見を用ゐて其通り遣るけれども、澁々、ギコチなく、内々危ぶみながら遣るので、兎角自分の流儀を出したがる。一躰非常に自分の意見を大事がる男なのです。あの金花といふ蟲が草を這上るのを見ると、仲々骨を折るもので、這上つて、刷をして飛びさうにするかと思ふと、コロリと轉落

ちて又這上るものだが、此男も恰ど然ういふやうに苦勞をして自分の意見に取付く……奇妙な比喩だが、僕には其時分からどうも然う思はれてならなかつた。然ういふやうな鹽梅で二年ばかり骨を折つて見たけれども、僕が何程骨を折つても、どうも面白く行かない。其内に僕も漸々草臥て友人が厭になつて來たから、徐徐辱め出す、友人は僕を羽布團と取違へてゞもゐるやうに無暗に壓付ける、初は唯僕を信用しなかつたのが今は默つて憤つてゐるやうになつて、互に敵愾心を起して來たから、最う何の話も出來なくなつて來た。それで友人も始終僕に服して居ない所をそれとはなしに見せ付けたがつて、僕の處分した事が處分通り行かなくなることもあれば、從頭行はれないこともある……詰りお地主

樣の家に學問のお相手になつて食客をしてゐるやうになつて來たから、徒に時間や精力を費したのが殘念で堪らない、また失望かと思ふと忌々しくなる。勿論別れゝば不利益は判つてゐるが、どうも辛抱が出來んで、或時厭な胸糞の惡くなる事があつて、友人の最も拙い處を視たので、全然大喧嘩を仕て了つて露西亞の粉を獨逸の糖蜜で練つたやうに學者振る旦那を棄てゝ、其處の家を出て了つた……」

「而して扶持の喰上をした」と云つてレジチフはルーヂンの肩へ兩手を掛けた。

「それはさうだ。て、又身が輕くなつて躰躰一貫で無人境に立つことになつた。最う何處へ飛て行つても關はないとなつた……

エイ、一杯飲まう！」

「君の健康を祝して飲まう……」と云ひながらレジチフは起上つてルーヂンの額に接吻して、「君の健康を祝して、それからバコールスキイの紀念のために……彼人も矢張貧乏だつた。」

暫くするとルーヂンが又口を開いて、

「ソレ是が僕の失敗第一號だ。如何です、次のを聽く氣が有りますか」

「聽かして呉れ給へ、是非。」

「あゝ、お饒舌も最う厭になつた。僕も最う隨分饒舌草臥たからね……けれども、仕方がない、話して了はう。それから僕も處々方々彷徨いて……さう〳〵、或顯官の、好人物だつたが、其人の書

記になりかゝつて妙な事も有つたが、其樣な事を話してゐると長くなるから、省略つて了つて……處々方々彷徨いて、結局に……笑つちや不可ぜ……實業家にならうと決心した、事業家にね。尤も或人に出遇つてから、さういふ機會になつて來たのだが、其人は……君も知つてゐるかも知れんが……クルベーエフといふ男だ……知らない？」

「知らない。けれども、ルーヂン、君の事業は……洒落のやうて何だか……事業家になつちや、出來やしない、君にして其位の事が解らんといふのも妙ぢやないか？」

「それは然うだ、けれども、僕の事業はそれぢあア何でせう？いや、クルベーエフは君に見せたかつた！　くだらん奴だと思ふと、

違ふよ。僕はこれでも昔は雄辯だつたさうだが、其男の前へ出ると、一文の價値もなくなる。非常に學問も有つて、博識で、商買や工業の事に掛けては、それこそ天才が有るのだ。非常な大計畫や奇想が混々として頭腦の中に沸上つて來るのだ。それで僕も此男と力を協せて公益になる事業をやらうと決心した……」

「事業といつて、如何な事を？」

ルーヂンは俯目になつて、

「いつたら、笑はれるだらうな。

「何故？　其樣な事はない、笑ひはしない。」

「なにね、某縣の或川を浚渫して舟の通ふやうに仕やうと計畫したのて、」と云つて、極が惡さうに莞爾する。

「なるほど！　然うすると、そのクルベーエフといふ男は資本家なのて？」

「いや、僕より貧乏なんだ」、と云つてルーヂンは徐と白髮頭を下げる。

レジネフは笑ひかけたが、急に止めて、ルーヂンの手を把つて、

「宥して呉れ給へ。だが餘り意外だつたから、ッイ……それて、如何だつたね、實行が出來なかつたかね？」

「いや、全然出來ないてもなかつた。手初だけは行つた。けれども、其處に種々故障が有つてね。まづ第一に、水車場の持主達が如何しても同意しない、けれども、水の事だから、機械なしにや、如何する事も出來ない、ところが機械を買ふ錢がないと來てえるのだ。

何ても六箇月ばかり二人て小舍住居をしてゐた。クルベーエフは始終麵麭ばかりて凌いてゐる、僕も腹一杯喰つたことはないといふ始末さ。けれども、今になつても後悔はしない、彼處の景色は非常に好かつたからね。一生懸命に運動して、商人を說いたり、手紙を書くやら、廻文を書くやらしてゐたが、詰り僕は嚢中無一物になつて了まつた。」

「成程！　澤心も無い處だからね。」

「さうとも。」

ルーヂンは窓の方を向いて、

「けれども、面白い計畫だつたがな……若し實行が出來たら、それは大した便利なものが出來たんだが……」

「それて、そのクルベーエフといふのは如何なつて了つたね？」

「クルベーエフ？　今西伯利へ往つて、金山か何かに關係してゐる。併し、彼男は、今に見給へ、屹度財產を作るから、名が出ずに了ふ男ぢやない。」

「それは然うかも知れんが、併し君は最う金は出來たね。」

「僕かね？　如何も仕樣がない！　尤も君は僕の事を始終愚痴奴だと思つてゐるのだらうけれども……」

「馬鹿を云つちや不可！……それは、成程、君の缺點ばかりが眼に付いた時代も有つたけれども、今は僕も修業が積だから、君の眞價が解るやうになつた。お世辭ぢやない。君は金を作るやうな男ぢやない……それだから僕は君を愛するのだ……それは

然うに違ひないさ！」

ルーヂンは力なく莞爾して、

「本當かい？」

「それだから僕は君に敬服してゐるのだ！　宜しいかい？」

二人とも默つて了つた。

やゝ有つてルーヂンが、

「如何だね、第三號に移らうか？」

「可からう。」

「では、第三號、これで、お終だ。この第三號は、今旁が附いたばかりなんだ。けれども、君は最う厭になりはしないか？」

「まア、文句を云はずに話し給へ。」

「そんなら話すが、或日閑な時に……尤もいつて閑なんだが……考へた、僕は相應に知識を持つてゐる、それに好意もある……ね、僕に好意のあるだけは、君だつて許して呉れるだらう？」

「勿論！」

「で、僕は最う他の事は何も出來ないやうになつて來たから、教育家にならう、平たく云へば、教師になるんだ……遊んでゐるよりか、其方が好い……」

と云つて歎息して、

「遊んでゐるよりか、自分の知つてゐることを人に傳へた方が可い、さうすれば人が僕の持つてゐる知識から利益を汲出すかも知れん。それに僕だつて其樣なに才が無いといふてもなし、饒舌る

ことも出來る……といふので、彌此新事業に懸ることにした。ところが、なか〳〵口がない、出稽古をやるのは厭だし、小學校なんぞは仕樣がない。それでも、到頭此處の中學校の教員にありついた。」

「何の教員？」

「露國文學の教員さ。これほど僕は熱心になつて行つたことはないね。何しても少年を薫陶しやうといふのだから、面白い。初度の講義を起草するには、何でも三週間ばかり掛つた。」

「その草稿は今でも在るかね？」

「いや、最う何處へか遣つて了つた。なか〳〵善く出來て、自分ながら氣に入つた。今でも生徒の面が眼前に隱現くやうだ――若い惡氣のない面を並べて、何も彼も忘れて了つて、熱心になつて、幾

分か驚いた氣味も有つて聽いてゐるのだからね。だから僕も講座に上つて、夢中になつて講義をしたが、大丈夫一時間餘は掛らうと思つてゐたのが、僅か二十分ばかりで終んで了つた。恰ど學校の幹事も來てゐたが、これは始終銀緣の眼鏡を掛けて短い鬚を着けてゐる干乾びたやうな老人でね、時々僕の方を向いては頷いてゐたつけが、講義が終んで僕が椅子を離れると、「善く出來ました。唯少し高尙すぎる、それから趣意の解りかねる處もあつたが、兎角枝葉の論が多いやうだつた」、と云つた。生徒は皆えらい先生だといひさうな面をして、僕の教場を出るのを見送つてゐた……本當に。それだから少年といふものは愛すべきものだね。二度目の講義も書て行たし、三度目のも然したが、其後は草稿になし行た。」

「それて旨く行つたかい？」

「旨く行つたねー　生徒は隊を成して傍聽に來た。だから僕も腹に在る事は殘らず打撒けて行つた。生徒の中にもなか〳〵感心に出來るのが三四人はあつたが、他は皆僕の云ふことが善くは解らない位なもので。けれども、實際を云へば、僕の云ふ事が解るといふ者でも、時とすると奇妙な質問を起して弱らせたこともあつたのさ。それでも一向落膽せずに行つた。僕を愛することは皆愛してゐて呉れたが、其代り試驗の時には皆に滿點を遣るのだからね。ところが、其中に僕を惡むて陷れんとする者が出來て來た……ぢやない、陷れるも何もないのだが、唯僕が些と行過ぎたのさ。だから人の邪魔になる、人も亦僕の邪魔をする。講義をす

ると云つても、大學生に向つてさへ滅多に其樣な事は云はないといふ程の事をいふのだから、生徒も聽いたつて左程益する所もない……事實となると、僕からして餘り知つては居らんのだ。それに僕も托されただけの仕事では滿足が出來ない……これが知つての通り、僕の病なんだ。そこで僕は根本的改革をやらうと目論だが、その改革といふのが、君の前だが極て必要な改革で、それて容易に實行が出來る譯だつたんだ。校長といふのは惡氣と云つては些ともない正直な男で、最初の内は僕も此男に對ふと勢力が有つたもんだから、これを利用して改革を實行しやうと思つてゐたんだ。それに其細君が力になつて呉れた。彼樣な女は滅多にはないね。四十に手の屆かうといふ年配なんだが、それてゐて、

十五六の小娘が何そのやうに、善いといふ事には深く心を打込むで、立派な事なら何でも好きで、誰の前でも自分の信ずる所は憚らずに云ふ。純潔で正氣が溢れるばかり有つて、僕は彼女の事は忘れやうとしても忘れられない。その細君の忠告で、改革案を書かうとした……ところが、陷れられたね、細君が人の讒言を信じて僕の事を惡く思ひ出した。殊に邪魔をしたのは數學の教員であつたが、小造の男で、鋭い、肝癪持の、何も信じない、ビガーソフ一流の人物だ、尤もビガーソフから視ると、遙に役に立つ男だけれども……ときに、ビガーソフは未だ達者でゐますかい？」

「達者でゐますとも、而も商人の後家を女房にしてゐる。細君には時々打たれるさうだ。」

「不思議はないね。それからナターリヤさんは？」

「健在だ。」

「幸福でゐるかね？」

「幸福だ。」

ルーヂンは默つて了つた。頓て、

「えゝと、何の話だつけ……さう〳〵！　數學の教員の話だつけ。其奴が僕を憎んで、僕の講義を烟花同然だなぞと云つて、少し明亮でない事を云ふと直ぐ押へる。一度なんぞは十六世紀頃の何かの紀念物のとて揚足を取つたこともあるが、第一僕の心を疑つてゐるのだ。それで僕の最後の石鹸玉も此男に出會つて、針にても逢着つたやうに、破裂けて了つた。幹事といふのも仲々手強な奴

だつたが、校長を煽てゝ、僕に反對させたもんだから、衝突したね。僕は一歩も譲るまいと思つて憤然となる。それが其筋の耳に入つて、僕は到頭非職さ。其儘往生して了ふことは出來んから、僕はさうはならない男だといふ所を一番見せつけて遣らうと思つたが……いや、實際如何てもなる男だ……それて今餘義なく田舍へ歸るのて。」

と話し止む。蕭然となつて、二人とも頸垂れて坐つてゐた。

頓てルーヂンが先づ話出した。

「かうした身の上になると、カリッオーフの歌の「身の措處なきまてに成果てたるも若氣から」といふ句が身にこたへる……けれども、實際僕は何の役にも立たん奴だらうか？　此世て僕に適する仕事は無いのだらうか？　僕はそれを平生疑つてゐるのだ。いくら自分て自分の估劵を落さうとして見ても、どうも僕の天分は多少厚い方だと思はんに行かん。それなら、何故此天分が無益になつて了ふのだらう？　それから君と一所に外國に行て居た時分は、僕もまだ自惚氣が熾んて、予簡が間違つてゐた。成程、彼時分は自分て自分の氣が知れなかつた、空論に醉つてゐて、夢のやうな事を信じてゐた。けれども、今僕が思つてゐる事は誰の前ても憚らずに云へる。隱したつて仕樣がないから、云つて了ふが、僕は全く惡氣のない人間だよ。だから溫順しくなつてゐる、境遇に適應したく思つてゐる、大した望も起さんて、卑近な目的ても可いから達したい聊かても可いから世を益したいと思つてゐる。